

都 と 甕

—七世紀飛鳥・藤原地域における煮炊具の研究—

渡 邊 淳 子

はじめに

第1章 七世紀飛鳥・藤原地域における
煮炊具研究の現状

第2章 飛鳥・藤原地域出土、土師器甕の検討

1. 在地甕の製作技法—大和A型と大和B型
2. 分析の方法

第3章 大和型甕A・Bの成立と展開

1. 飛鳥I～V・奈良時代における土師器甕の様相
2. 時期別にみた変化
3. 地域別にみた傾向

第4章 藤原の都と甕

1. 都の甕—都城独自の供給体制の成立
2. 都の外の甕—在地の生産体制

おわりに

1. まとめ
2. 今後の展望

(図版1～16)

はじめに

今から1300年前、大和三山に囲まれた地に日本で初めての都—藤原京が誕生した。それまで政治施行機関と皇室の宮室のみであった飛鳥の宮から、貴族・役人・庶民など多量の人々の集住する生活空間を兼ね備えた都市の誕生であった。

この特殊な空間の一側面を、土師器甕から復元してみようと思う。煮炊具は供膳具に比べ、製作集団の違いによる技法の相違を見出しやすい。供膳具が人々が食事の際、目にしたり手にとったりする器であるのに対し、煮炊具は食事を作る際の調理の容器である。前者は人々の「目に触れる土器」であり外見が重視されるが、後者は調理（煮炊き）という機能に重点がある。律令体制の下、古代の都城では身分制度を具現化するものとして形態と法量に規格性をもった食器が供給されることになる（文献32）。そのため各製作集団ごとの個性は失われ統一化される傾向にある。しかし「目に触れない土器」である煮炊具は機能さえ果たせば問題はなく、供膳具ほど厳密な規格性がとられていなかったとみてよい。それゆえ、製作行程を推測しうるような痕跡をとどめているものが比較的多くみられ、個体間ひいては集団間の個性・クセが現れやすいといえる。また煮炊具は在地との結びつきが強い性格をもっている。供膳具は都城へは貢納品として、地方では律令体制を象徴する品としてもたらされるように流通的側面が強い。一方煮炊具は、日常生活品としてそれぞれの地域で在地生産・在地

消費される場合が多い。供膳具が律令体制の地方への波及を明らかにできるのに対し、煮炊具は在地の生産・消費のありかたと、律令体制との関わりを探ることが出来る。

これらの特性をふまえ、飛鳥・藤原地域における在土師器甕を製作技法の上から分析し、飛鳥Ⅰ～Ⅴ・奈良時代にかけての様相をみる。そして、律令国家政策にともなって人工的につくられた都城とはいかなる実体をもつものだったのか、また都城の成立によって都城がおかれた地域（藤原地域）やその周辺地域（飛鳥地域）はどのように変化し影響を受けたのだろうか。この二点を解明することを本稿の最終的な目的としたい。

第1章 七世紀飛鳥・藤原における煮炊具研究の現状

飛鳥・藤原地域では、1969年に奈良国立文化財研究所による本格的な発掘調査が始まった。現在は奈良国立文化財研究所をはじめ、奈良県立橿原考古学研究所・橿原市教育委員会・桜井市教育委員会・明日香村教育委員会等が発掘調査にあたり、日々新たな発見が続いている。

これらの調査成果をもとに、当地域における七世紀の土器研究も進展してきた。供膳具形態については、1970年代後半、西弘海氏によって飛鳥Ⅰ～Ⅴとする編年の枠組みが確立され（文献33、34）、新資料の追加によりその詳細が明らかになりつつある。一方、変化のあまり顕著でない煮炊具に関する研究は、型式分類や編年が十分になされておらず、いまだ立ち遅れている感がする。事実、七世紀飛鳥・藤原地域における煮炊具をテーマに扱った個別の研究は見当たらない。しかし、①畿内各国における六～八世紀の煮炊具の体系的な研究や、②都城の煮炊具に関する研究のなかで部分的に触られている。そこでこれらの研究を取り上げ、七世紀飛鳥・藤原地域における煮炊具研究の現状を把握してみることにする。

まず①の畿内各国における六～八世紀の煮炊具研究については、1980年小笠原好彦氏が七～八世紀の土師器甕を調整手法の違いから旧国単位ごとの地域に分かれるとし、大和型・河内型・山城型・和泉型・摂津型・近江型・伊賀型・伊勢型を提示した（文献2）。これは一つの国から一つのタイプの甕を代表させる、一国一型式といえる内容のものであった。

その後西口壽生氏が六・七世紀の土師器甕を取り上げ、それぞれの地域で小笠原氏が設定した一国一型式以外にも別種の甕（型）が存在することを指摘した。そして一国に複数の型式が認められたり、製作技法の上で旧国を超えた大きな分布圏が存在する場合もありえるとし、一つの型式が旧国単位の枠の中に必ずしもおさまらないという見解を示した（文献36）。

さらに近年、古代の土器研究会が発足し、全国の煮炊具の研究についても本格的に取り組まれるようになってきた。それにより、土師器甕の地域色は律令体制下における国郡等の行政単位と必ずしも一致する（一国一型式）わけではなく、複数の型式が認められたり、あるいは国を超えた大きなまとまりが存在することが認識されるに至った（文献4、5）。

このような流れのなかで、畿内の一地域である飛鳥・藤原地域の土師器甕の様相はどの程度明らかになっているのであろうか。まず当地域の主流を占める甕として、先に述べたように小笠原氏が大和型という一つの型式を設定した（文献2）。その後西氏が製作技法の共通性に着目し、煮炊具と供膳具のセット関係を明らかにして、従来言われていた大和型以外に複数の大和産（在地産）甕の系統を挙げた（文献35）。最近では、巽淳一郎氏・次山淳氏が七世紀における当地域の煮炊具の様相として、複数のグループによる在地の製品を主体とし、これに他地域からの搬入品が加わり構成されると報告している（文献7、8）。

次に②の都城の煮炊具に関する研究についてみる。各都城でみられる土師器甕の様相について小笠原氏は、藤原宮・京では大和型が主体でそれに河内型が次ぎ、平城宮・京では主体は同じく大和型だがこれに次ぐのが山城型に変わることを挙げ、都城から出土している土師器甕は都城がおかれている地域のもので主体を占め、その次にくるものは隣国からもたらされるとした（文献2）。これに対し西氏は平城京遷都前の大和北部地域は近江型が主流を占めていたとし、平城京成立以降大和型が主体となるのは、藤原宮・京に大和型甕を供給していたグループが遷都とともに移動し、近江型甕が劣勢な位置におかれ、大和型甕に駆逐されたからであるとの見解を示した（文献35）。また西口氏は藤原宮・京で大和型に次ぐ土師器甕は河内型ではなく、大和型以外の在地甕であるとしている（文献37）。そして他地域からの搬入に関しては、都城へもたらされる甕はその国の代表的なものに限られるとし、これらの製作者集団をかかえていた豪族が中央政権と強い関わりをもっていたことを示すと想定した（文献36）。

各都城ごとの土師器甕の様相を明らかにする一方で、都城という一連のつながりのなかで土師器甕を捉えていこうとする研究も進められている。三好美穂氏は、各都城遺跡において主体を占める土師器甕が製作技法の点で藤原京・平城京・長岡京・平安京にわたって同じ系譜内にあることを証明し、西氏が指摘した甕工人の移動（文献35）が平城京だけにとどまらず、長岡京・平安京遷都の際にも認められることを明らかにした（文献40～42）。また小森俊寛氏は各都城を通じて発展した同一系譜内の甕を、都城の甕という規範のもとに同一の形式を有していることから「都城形甕」と提唱した（文献6）。

以上のように七世紀飛鳥・藤原地域における煮炊具研究は、各論文で部分的に触れられているか事例報告にとどまっている状態である。当地域の煮炊具を考古学的に分析することによって七世紀飛鳥・藤原地域の社会を復元する余地は十分にあるといえる。

従って本稿では、製作技法の上から土師器甕を分類し、対象遺跡ごとにそれぞれのグループの割合を出す。それが飛鳥Ⅰ～Ⅴ・奈良時代にかけてどのように変遷していったか、また藤原宮・京内とその周辺にあたる飛鳥地域では違いがみられるのか調べる。そして、藤原京

の成立により在地の生産・消費システムがどのような影響を受けたのかを明らかにしたい。

第2章 飛鳥・藤原出土、土師器甕の検討

ここでは分析をするにあたって、まず在地甕の製作技法の検討を行ない、これまでの分類を概観した上で、新たに分類を設定する。そして次に、その分類をもとにどのような分析をしていくか述べる。

1. 在地甕の製作技法—大和A型と大和B型

第1章で触れたように、七世紀飛鳥・藤原地域で見られる土師器甕として、小笠原氏がまず大和型を提示した。小笠原氏は大和型甕は、体部は球胴形をなし、器高の半分の位置に最大径があり、口縁端部の巻き込みが強く、調整は体部外面は縦にハケ目を、内面には原則としてハケ目をつけない点が特徴であるとしている（文献2）。

その後新資料の追加により、大和型以外に複数の型式の在地甕が存在することが明らかになっている。形態や調整、製作技法等の差異から西氏、巽氏、次山氏が分類を行なっているが、それぞれの分類の基準が少しずつ異なっている。以下各氏の分類を挙げる。

西 弘海氏…A₁、A₂、A₃（図版2）

形態や調整をもとに分類している。A₁は、形態は底部丸底で球形をなし、調整は外面ハケ、内面はナデ（一部ハケ調整するものあり）を施す。小笠原氏の設定した大和A型に相当する。

A₂は、形態は底部があいまいな平底を呈し、底部と体部の立ち上がる部分との境に段がみられる。調整は体部に希薄なハケ調整、底部は未調整のままである。

A₃は、図面のみが掲載されており説明の記述がない。図化されている遺物の報告書（文献27）の文章を要約すると、体部外面に粗いハケを施すものと、体部外面下半に粗いハケを施し他の部分をナデで仕上げるものがある。いずれも茶褐色系の色調である。甕B⁽⁶⁾の把手の付加は挿入法による⁽¹⁾。

西氏は底部の形態や調整からA₁・A₂の底部の製作技法について言及している。まずA₁は体部中位から底部にかけて走る不定方向のハケ目が平底から丸底の底部を形成したものとしている。A₂は底部付近の段や凹凸が残る未調整のままの底部から型づくりを想定し、そのためにあいまいな平底を呈するとしている。

巽淳一郎氏…大和A型、大和B型（図版2）

製作技法による分類を基本としている。大和A型は、まず平底から上に粘土紐を巻き上げ鉢形の原体をつくり、次に外面全体をハケで調整し、口縁部形成の後に肩部と底部を叩いて

球胴形の体部を形成し、最後に外面に再度ハケ調整を、内面にナデ調整を加え完成する甕とした。形態に関しては、球形の体部で胴の最大径は口縁部より大きい。口縁端部は縁帯風につくりだし、上方に小さく突出する。この大和A型は小笠原氏の大和型、西氏のA₁にあてはまる。

大和B型は、底部を外型を使って形成し、その上に粘土紐を巻き上げ、次に原体に粗いハケを施した後に口縁部を形成し、胴部内面を工具で押し引きして器面を整え、最後に型を外し型の上端付近にできた段差をハケ目で調整しかたちを整える甕である。形態はやや胴長の丸底で、胴部最大径は肩部近くにあつて口縁より小さい。口縁部形態に関する記載はない。西氏のA₂・A₃に相当する。

次山 淳氏… a (a′)、b (b′)、cグループ (図版3)

形態・調整などによって3グループに分けている。aグループは小笠原氏の大和型、西氏のA₁、巽氏の大和A型にあてはまる。口縁部の形態は強く外反し、端部は垂直な面をもつ。これとは別に端部を丸く納めるものをa′とし、西氏のA₂の一部と巽氏の大和B型の一部をこのなかに入れている。調整は体部外面ハケ、内面はナデもしくはハケ調整を施す。体部内面には当具痕がみられる場合がある。甕Bや鍋Bの把手の付加は張り付け法による。

bグループは、西氏のA₃、巽氏の大和B型の一部に相当する。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く納める。一部強く巻き込み状に肥厚させる場合もある。調整は体部外面ハケ、内面はナデもしくはハケ調整を施す。外面のハケ目はナデ消されているものがある。b′として頸部内面に削りを加えるものがある。体部下半には保持具(外型)の圧痕を残すものが見られる。把手の付加は挿入法による。

cグループは、西氏のA₂の一部と巽氏の大和B型の一部にあてはまる。口縁部の形態は緩やかに外反し、端部は丸く納める。調整は体部内外面ともナデ調整である。体部下半に保持具の圧痕や粘土帯の積み上げ痕を明瞭に残す。把手の付加は挿入法による⁽³⁾。

三氏の分類をみると、事例報告の記述であるためそれぞれの型式について十分な定義がなされていない部分がある。また各氏ごとに分類の基準が少しずつ異なっているために、一つの型式でくくる場合や二つのグループに分ける場合が出てきたり、同じ甕を別型式のものにする場合が起こっている⁽³⁾。

分類を行なうには、分けるモノとモノの間になんらかの差異を見出さなければならない。差異は形態や調整、成形時の痕跡に認められる。重要なのはその差異が何の差を表わしているかということである。製作集団の差、集団の中の個人の差、一個人の状況による差なのかを見極める必要がある。ここで筆者が分類を行なう目的は飛鳥・藤原地域で出土する在地甕の製作技術基盤の把握をし、その中でどのようなグループが存在していたかを明らかにする

ことにある。まず製作技術基盤を把握をするため、相容れない製作技法上の違いを表わす差異に着目する。そこで土師器甕に残された成形時の痕跡から底部の製作技法を復元し、この技法を相容れない製作技法上の違いとする。そしてこの底部製作技法を基準として型式を分ける。次に製作技法の違いを反映する体部～底部の形態差や、調整の差をそれぞれのグループの属性として捉える。最後に口縁部形態や胎土・色調などそれぞれのグループに一般的にみられる傾向を挙げる。以上のような手続きを踏んで分類を行なったところ、大きく二型式に分類できた。これを大和A型、大和B型と呼ぶことにする（図版4、5）。以下その概要を記す。

大和A型（図版9）…底部～体部内面にかけて円形状の凹面がみられ、外面はその凹面に対応するかたちで偏平な面が構成される。これは成形の際内面に当具をあてがい、外面を叩いたためとおもわれる。大和A型は叩きを行なうことによって球胴状の器形をつくりだしているといえる⁽⁴⁾。

そのため体部の形態は胴部が張ったような膨らみをもっており、底部は丸底を呈している。調整をみると外面はハケ調整されているが、体部にハケを施した後で再度底部から体部にかけてハケ目をつけている。これは叩きによって丸底にした底部の器面を整えるためであると考えられる。内面は当具痕の凹面を平滑にするように板状の工具でナデしており、工具のアタリが器面についている場合がある。

その他の特徴としては口縁部が強く外反し、端部は面をもつ。胎土は砂粒を多く含み粗く、色調は橙色系統を呈す。

大和B型（図版9）…外面もしくは内面の底部下半にリング状の段が認められる。この段は成形の際に底部を杯や皿などの作業台の上に置いたため、台の上端（口縁）付近が体部下半の器面に当たりついたものと推測する⁽⁴⁾。また内面体部と底部の境には継ぎ目が残っていることがあり、ここで作業単位が変わっていることをうかがわせる。体部～底部内面は大和A型のような凹面はなく、粘土紐の積み上げ痕を比較的残しているものが多い。つまり叩きを加えた形跡がみられないことになる。以上のことから大和B型は、作業台に粘土を詰めその上に粘土紐を継ぎ足し積み上げて成形するという技法をとる。

叩きを加えないため底部は作業台にはめた時のままの形態を残し、丸みを帯びた平底となる。体部の形態も叩きを加えないため胴部に張りがなく、頸部のくびれもみられない。寸胴でやや縦長のプロポーションをしている。

調整は、体部外面はハケ調整またはナデを施し、体部下半から底部にかけてはナデ消している。これは作業台から外したときについている段を消し、器面を整えたためであろう。内面はナデ付けをおこなう。体部下半から底部にかけては強くナデ付けた痕や、オサエがみられるものが多いが、これは底部は器面を作業台に密着させるため、体部下半は作業台との境

の継ぎ目を消すためであろう。

その他の特徴としては、口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く納める。外面のハケ目は比較的粗く希薄である。胎土はシルト質で密であり、色調は灰色系統である。

以上のように製作技法の違いにより、飛鳥・藤原地域の在地甕は大和A型・大和B型という二つの型式に大別できる。ここで取り上げたものは大和A型・大和B型の典型的なタイプである。それぞれの型式には形態や調整の上で数種のバリエーションがみられる。例えば大和A型のなかには内面にハケ目のみられるものがあるが、これは木目のある板状工具を使用したためで当具により凹凸になった内面を平滑にするという意味では板ナデと同じ行為であるとみなす。また口縁部内面に稜をもち端部が先細りするということという特徴をもった一群が存在するが、底部の作り方は大和B型の手法を用いているので大和B型の範疇に入れることにする。このように形態や調整の上で差異が認められても同じ技術基盤の上に製作されたものとみなされるものは一つの型式でくくりにする。

ここで大和A型・大和B型両者の、型式の時間的変遷について触れておく（図版5）。大和A型は時期を経るにつれ叩きの範囲が底部から肩部まで及ぶようになり、長円形の体部形態から半球形に近いものへと変化する。口縁部は傾斜がきつくなり、端部は緩やかな面をもつもの→しっかりとした面をもつもの→内側へ巻き込むものへと変化していく。

大和B型は、体部下半についた作業台のアタリをナデ消し器面を整える作業を省略化していく傾向にある。そのため時期を経るにつれ、段を明瞭に残すものが目立ってくる。口縁部は次第に傾斜がきつくなり、短くなる。

2. 分析の方法

分析をしていくにあたって、対象資料の選び方やデータの取り方など具体的な方法を述べることにする。

まず対象となる遺跡・遺構であるが、時期的には飛鳥I～V・奈良時代とし、地域的には飛鳥地域と藤原地域を現段階で可能な限り網羅できるよう遺跡を選び、井戸や土坑など出土遺物の一括性が高く土師器甕がまとまって出土している遺構を対象とした（図版1）。総数は22にのぼる。各遺跡・遺構の概要や性格は一覧表に記した（表1）。対象資料は煮炊具のなかでも出土量の多い土師器甕を中心とするが、鍋や小壺Bなど同じ土師器甕製作集団によるものとおもわれる器種も適時扱う。計測法は個体識別法を用いた。小破片に関しては口縁部や底部などデータをとるに耐える部分のみ扱った。

分析の内容は前節の分類を踏まえ、口縁部形態、内外面の調整、底部形態、胎土、色調とそれぞれの属性分析をする。そして総合的にみて、大和A型、大和B型、他地域のいずれに含まれるのかを判断する。大和A型・大和B型についてはさらに細かな小グループに分かれ

表1 対象遺跡一覧

時期	No	遺跡名	遺構名	概要	文献
飛鳥Ⅰ	1	雷丘北方遺跡第5次	S D3580	七世紀前半の掘立柱建物の西を区画する南北溝。幅2.9～5.2m、深さ1.0m前後。体積土は大きく三層に分かれ、七世紀前半の土師器・須恵器とともに木簡削屑・木片が出土。土器群の大半はNa3飛鳥池遺跡の土器群と共通する。	27
	2	石神遺跡第4次	S E800 茶褐色機土層	杉の巨木を半裁し杏仁形に合わせた井戸枠をもち、周囲に玉石を敷きつめた方形石組状の井戸。井戸の層序は4層に分けられ、出土遺物は土師器甕類、須恵器平瓶・壺類が多い。茶褐色機土層は最下層にあたり使用時の堆積土とみられる。土器群は杯Cの径高指数・調整から飛鳥Ⅰに属すると考えられる。	17 38
	3	飛鳥池遺跡	S D809 灰緑色粘砂層	七世紀後半の工房跡下層にあたる谷筋S D809の堆積層。 杯類はNa5坂田寺遺跡S G100より古く、川原寺S D02より新しいとされる。	25
飛鳥Ⅱ	4	石神遺跡第4次	S E800 礫混じり砂層	三層にあたり、人頭大の石が多量に混じる埋め立て土。土器群は杯Cから飛鳥Ⅱにちかい内容である。	38
	5	坂田寺遺跡	S G100	遺構は南北幅10m、東西幅6m以上の池。中央部での深さは1m以上である。遺物は池(S G100)内堆積土から出土。杯類は飛鳥Ⅱの基準資料となっている。	12
飛鳥Ⅲ	6	藤原宮第66次 西方官衙北地区	S E7320	径1.5m、深さ1.1mの円形の井戸。堆積土は暗灰色砂質土で、飛鳥Ⅲの土器が出土。 藤原宮造営以前の藤原宮地域の開発が推定される。	24
	7	石神遺跡第4次	S E800 バラス層	二層にあたり、人頭大の石が詰まった短期観の埋め立て土。土器群は飛鳥Ⅲに属すると考えられる。	38
飛鳥Ⅳ	8	藤原京第52次 右京二条三坊	S E5290	不整形な堀形の中央部に径1.7mの二段堀形を持つ。井戸枠は検出面下1.5mまでしか存在せず、それ以下は素掘りであるため井戸の改修が行なわれたと考えられる。飛鳥Ⅳの土器が大量に出土している。	20
	9	藤原宮第20次 大極殿院地区	S D1901A 木炭層	幅6～7m、深さ約2mの南北溝。藤原宮・京造営に関わる運河の遺構と考えられる。木炭層からは天武11～19年の紀年木簡が出土。土器群は飛鳥Ⅳの基準資料となっている。	14
	10	藤原宮第16次 内裏地区	S E1780	藤原宮期以前の掘立柱建物に関連する、径1.2m、深さ1.5mの素掘りの井戸。土器群は飛鳥Ⅳに位置づけられ、杯皿類が少なく土師器甕の体部が多いのが特徴である。藤原宮の造営にあたって廃棄されたものであろう。	19
	11	藤原宮第7次 西方官衙地区	S E1205	内法0.65mの縦板組の井戸。土器・木器が出土している。遺構の廃絶が飛鳥Ⅳにあたり、削掛・独楽など一般集落に例のない木製品が出土していることから、藤原宮造営に関わる人々の居所と推測される。	11

時期	No.	遺 跡 名	遺 構 名	概 要	文献
飛鳥IV	12	藤原宮第72次 西南官衙地区	S E 8061	井戸枠は長さ236~240cm、幅55~63cmの板4枚を立てたもの。土器は藤原宮期直前に位置づけられる良好な一括資料である。完形の土師器甕類・須恵器壺類を主体とし、食器類が極めて少ないのが特徴である。	26
	13	石神遺跡第3次	S E 650	内法約0.9m、深さ約2.8mの井籠組の井戸。井戸埋土から多量の土器出土。甕・壺類が多い。土師器・須恵器杯類から飛鳥IVに相当する。七世紀末、当遺跡が大規模な改作がおこなわれたことを示す。	16
	14	飛鳥池遺跡第93次	S E 59	工房を区画する塀の北東にある縦板横棧組の小型の井戸。堀形一辺1.35m、井戸枠一辺0.7m、深さ1.6m。井戸底から飛鳥IVに相当する土師器甕が出土。	30
飛鳥V	15	藤原京第54-23次 右京二条二坊	S E 6340	内法0.9m、深さ3.5mの横板組・方形の井戸。坪内東北隅に位置し、宅地内で重要な役割を果たしていたと考えられる。井戸枠の内部には暗灰粘質土層が堆積しており、その下部などで藤原宮期の完形土器が多数出土した。	21
	16	藤原宮第6次 西方官衙南地区	S E 1160	藤原宮の建物に関連するとされる井戸・内法0.91mの井籠組になっている。土器・瓦・銅版の切り屑・木製品および多くの桃核が埋没していた。	11
	17	藤原京第58-20次 左京九条四坊	S E 2440	一辺0.9mの縦板組の井戸。堆積土である底近くの青灰色砂層から完形の土師器甕・壺、須恵器壺や金属製品が出土。埋土である上層の黄灰色粘土からは大官大寺の瓦が出土した。出土土器から藤原宮期にあたる。	22
	18	藤原京第63-3次 右京九条三坊	S E 2660	一辺約0.6mの方形縦板組の井戸。井戸枠内から出土した遺物には須恵器の甕・壺・横瓶、土師器の甕などがある。井戸埋没後に堆積した埋土最上層からは、藤原宮期の土師器・須恵器が出土した。	23
飛鳥IV V	19	飛鳥池遺跡第84次	S D 01、S G 30	東西約7.9m、南北約8.6mの玉石積み石組方形池と池の西南隅に注ぎ込む導水路。遺物は現在整理中。	29
奈良	20	藤原宮第36次 西北官衙地区	S D 145	藤原宮外郭施設の北面外濠にあたり、幅7.5m、深さ1.7mをはかる。出土遺物のうちほとんどが奈良時代前半に属する。	15
	21	藤原京第47次 左京六条三坊	S E 4740	建築部材を転用した、内法一辺0.9mの方形・横板組の枠をもつ井戸。層序は四層に分かれ、三層にあたる下層からは平城三段階の土器が多く出土した。「香山」の墨書土器から、香山正倉の存在が考えられる。	18
	22	橋寺遺跡	S K 05	東西4.5m×南北3.5m、深さ1.5mの土坑。埋土の堆積状況から、造宮工事の際の廃材やゴミを捨てたゴミ捨て穴と想定される。土器は奈良時代のもものが中心である。	19

表2 土師器甕分析集計表

時期	No.	遺跡名・遺構名	大和 A	a	ax	ab	大和 B	b	bx	ba	大和 不明	他 地域	不明	合計	備 考
飛鳥Ⅰ	1	雷丘北方遺跡第5次 S D3580	27	18	8	1	46	26	17	3	1	9	14	97	ax・bx 目立つ
飛鳥Ⅰ	2	石神遺跡第4次 S E800・茶褐有機土層	27	16	8	3	28	21	6	1	0	23	1	79	他地域が多い
飛鳥Ⅰ	3	飛鳥池遺跡 S D809・灰緑粘砂層	10	3	5	2	10	5	5	0	0	11	6	37	他地域が多い
飛鳥Ⅱ	4	石神遺跡第4次 S E800・礫混じり砂層	49	36	5	2	43	31	5	7	1	33	8	128	ax・ab、bx・ba有り
飛鳥Ⅱ	5	坂田寺遺跡 S G100	29	14	8	1	51	43	8	0	0	5	9	83	ax・bx 有り
飛鳥Ⅲ	6	藤原宮第66次西方官衙北地区 S E7320	2	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	4	大和A：B=1：1
飛鳥Ⅲ	7	石神遺跡第4次 S E800・パラス層	29	18	9	2	13	12	1	0	1	13	3	59	ax 目立つ
飛鳥Ⅳ	8	藤原京第52次右京二条三坊 S E5290	24	23	1	0	5	5	0	0	0	3	2	34	aが主体
飛鳥Ⅳ	9	藤原宮第20次大極殿院地区 S D1901A	48	45	2	1	42	37	3	2	1	11	3	105	小壺B、鍋が目立つ
飛鳥Ⅳ	10	藤原宮第16次内裏地区 S E1780	22	21	1	0	10	9	1	0	0	3	0	35	大和A：B=2：1
飛鳥Ⅳ	11	藤原宮第7次西方官衙地区 S E1205	3	3	0	0	3	3	0	0	0	0	0	6	大和A：B=1：1
飛鳥Ⅳ	12	藤原宮第72次西南官衙地区 S E8061	21	21	0	0	43	39	3	1	0	4	1	69	大和A：B=1：2
飛鳥Ⅳ	13	石神遺跡第3次 S E650	96	85	10	1	30	23	6	1	2	19	10	157	他地域目立つ
飛鳥Ⅳ	14	飛鳥池遺跡第93次 S E59	4	3	1	0	4	2	2	0	0	1	0	9	大和A：B=1：1
飛鳥Ⅴ	15	藤原京第54-23次右京二条二坊 S E6340	11	9	1	1	2	2	0	0	0	1	0	14	aが主体、小壺Bは大和B
飛鳥Ⅴ	16	藤原宮第6次西方官衙南地区 S E1160	19	18	1	0	7	7	0	0	0	1	2	29	aが主体
飛鳥Ⅴ	17	藤原京第58-20次左京九条四坊 S E2440	15	13	2	0	2	2	0	0	0	3	1	21	aが主体、大和Bは小壺Bのみ
飛鳥Ⅴ	18	藤原京第63-3次右京九条三坊 S E2660	6	6	0	0	1	1	0	0	0	2	1	10	aが主体
飛鳥Ⅳ～Ⅴ	19	飛鳥池遺跡第84次 S D01、S G30													大和A：B=1：1、鍋多い
奈良	20	藤原宮第36次西北官衙地区 S D145	110	100	9	1	24	20	3	1	0	2	5	141	aが主体、小壺Bは大和B
奈良	21	藤原京第47次左京六条三坊 S E4740	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	aが主体
奈良	22	橘寺遺跡 S K05	73	70	3	0	38	32	6	0	0	9	7	127	大和Bが一定量有り

表3 大和A型・大和B型における形式的統一

(飛鳥地域)			(藤原地域)			
時期	No	遺跡 遺構名	No	遺跡 遺構名		
飛鳥I	3	飛鳥池遺跡 灰緑粘砂層	S D809	1	雷丘北方遺跡 第5次	S D3580
	2	石神遺跡第4次	S E800 茶褐有機土層			
飛鳥II	5	坂田寺遺跡	S G100			
	4	石神遺跡第4次	S E800 礫混じり砂層			
飛鳥III	7	石神遺跡第4次	S E800 パラス層	6	藤原宮第66次 西方官衙北地区	S E7320
	13	石神遺跡第3次	S E650	12	藤原宮第72次 西南官衙地区	S E8061
飛鳥IV	14	飛鳥池遺跡第93次	S E59	11	藤原宮第7次 西方官衙地区	S E1205
飛鳥V	19	飛鳥池遺跡第84次	S D01 S G30	10	藤原宮第16次 内裏地区	S E1780
				9	藤原宮第20次 大極殿院地区	S D1901A 木炭層
奈良	22	橘寺遺跡	S K05	8	藤原京第52次 右京二条三坊	S E5290
				18	藤原京第63-3次 右京九条三坊	S E2660
				17	藤原京第58-20次 左京九条四坊	S E2440
				16	藤原宮第6次 西方官衙南地区	S E1160
				15	藤原京第54-23次 右京二条二坊	S E6340
				21	藤原京第47次 左京六条三坊	S E4740
				20	藤原宮第36次 西北官衙地区	S D145

るため、以下のように細分をする（図版4）。

大和A型：a…大和A型の典型的なタイプ

ab…製作技法の上では大和A型だが、口縁部形態や調整の上で部分的に大和B型の要素が含まれるもの

ax…製作技法の上では大和A型だが、口縁部形態や調整がaと異なるもの
（大和B型の要素は含まれない）

大和B型：b…大和B型の典型的なタイプ

ba…製作技法の上では大和B型だが、口縁部形態や調整の上で部分的に大和A型の要素が含まれるもの

bx…製作技法の上では大和B型だが、口縁部形態や調整がbと異なるもの
（大和A型の要素は含まれない）

ここで大和AかBか判別しがたい資料があった場合、残存率が悪いなど情報量が少ないためどちらの型式になるのか分からない場合は大和不明とし、残りが良いにもかかわらずお互いの要素を持ち合わせており、abかbaか判別しがたいものは統計的に処理する⁽⁷⁾。

この方法で対象資料の分類を行ない、各遺跡・遺構ごとに集計する。そして大和A（a、ab、ax）、大和B（b、ba、bx）、他地域のそれぞれの割合が、

- ・時期（藤原宮成立前と成立後）によって変化するのか
 - ・地域（藤原地域と飛鳥地域）によって傾向はみられるのか
- を明らかにする。

第3章 大和型甕A・Bの成立と展開

1. 飛鳥I～V・奈良時代における土師器甕の様相

先述したように対象とした遺構の分析結果は表2のとおりにまとめることができる。そこでまず飛鳥I～V・奈良時代の各遺跡の土師器甕の様相をみていく。

①飛鳥I（図版10）

No.1 雷丘北方遺跡第5次 SD3580（図版10） 大和A型（以下大和Aとする）（3～5）・大和B型（以下大和Bとする）（1、2）が主体を占め、両者の割合は大和A：B＝29：46と大和Bのほうが多い。axでは口縁端部を強く上方につまみ上げ、色調が白橙色を呈すもの（3、4）、baでは内面に板ナデを施すもの（1、2）などがある。その他ab・bxもみられる。

No.2 石神遺跡第4次 SE800茶褐色有機土層（図版10） 大和A（8）・B（6、7）・他地域産（9～11）がほぼ同数の割合で構成されている。axでは口縁が短く直立するもの（8）

などがある。その他 $ab \cdot bx$ もみられる。

No. 3 飛鳥池遺跡 SD809 灰緑粘砂層 (図版10) 大和A (13~15)・大和B (12)・他地域産 (16~22) がほぼ同数の割合で構成されている。 ax では口縁が短く直線的に伸び、頸部がはっきりとした稜を成すもの (13)、 ab では内面をナデ付け、色調が灰褐色を呈すもの (14、15) などがある。その他 bx もみられる。

3 遺跡とも飛鳥 I のなかでは後出のものであるが、大和A・Bのなかでそれぞれ $ax \cdot bx$ の割合が高く $ab \cdot ba$ もあることから、 $a \cdot b$ と異なるものが多くみられるという特徴をもっている。

②飛鳥 II (図版11)

No. 4 石神遺跡第4次 SE800 礫混じり砂層 (図版11) 大和A (9)・大和B (8)・他地域産 (1~7) がほぼ同じ割合で含まれている。大和A・Bについては $ax \cdot ab$ 、 $bx \cdot ba$ もみられる。

No. 5 坂田寺遺跡 SG100 (図版11) 在地のものが主体を占め、大和A (10~14) : B (16~21) = 24 : 50と大和Bのほうが多い。 ax では口縁端部が飛び出るもの (11)、 bx では口縁内面に稜をもち端部が先細りするもの (20、21) などがある。

飛鳥 I と同様に大和A・Bについては $a \cdot b$ 以外に $ax \cdot bx$ が目立ち、 $ab \cdot ba$ もみられる。

③飛鳥 III (図版11、12)

No. 6 藤原宮第66次西方官衙北地区 SE7320 (図版11) 個体数が少ないという問題点はあるが、大和A (22) : B (23) = 2 : 2 と同数みられる内容である。

No. 7 石神遺跡第4次 SE800 バラス層 (図版12) 大和A (2~5) : 大和B (1) : 他地域産 (6、7) = 2 : 1 : 1 となっており、大和Aのつぎに大和Bと他地域産のものが同じ割合で含まれるという構成になっている。 ax では口縁端部が外に飛び出るもの (5)、 ab では口縁端部を丸く納め、色調は灰黄色を呈すもの (2) などがみられる。

④飛鳥 IV (図版12~15)

No. 8 藤原京第52次右京二条三坊 SE5290 (図版12) 大和A (8~10) が主体を占め、大和B (11)・他地域 (12、13) が少数混じるという構成を示している。

No. 9 藤原宮第20次大極殿院地区 SD1901A 木炭層 (図版12) 大和A (15、17、19~22、24、25) : B (16、18、23、26、27) の割合がほぼ同じである。小壺Bが出土しており、大半が大和Bの手法で作られている。鍋・小壺Bの出土量が目立つ。

No. 10 藤原宮第16次内裏地区 SE1780 (図版13) 大和A (1~8) : 大和B (10、11) = 2 : 1 の比率となっている。他地域産 (9) は量的に少ない。

No. 11 藤原宮第7次西方官衙地区 SE1205 (図版13) 大和A (13、16、17) : B (12、14、

15) の割合が同じである。小壺Bが出土しており大和Bの手法で作られている。

No.12藤原宮第72次西南官衙地区 SE8061 (図版14) 大和A (1~8):大和B (9~19) = 1:2の比率となっている。他地域産(20、21)は量的に少ない。

No.13石神遺跡第3次 SE650 (図版13) 大和A (22~24)が主体を占め、大和B (25~27)・他地域(18~21)が少数混じるという構成を示している。axとして口縁端部が外に飛び出ており、頸部がはっきりとした稜をなし、色調が浅黄色を呈すもの(24)、内面の調整がケズりに近いもの(22)などがみられる。当遺跡ではその他 ab・bx・baがあり、a・b以外のものが一定量含まれる。

No.14飛鳥池遺跡第93次 SE59 (図版15) 大和A (20~22):大和B (23、24) = 4:4とほぼ同じ割合を示す。ax、bxも一定量含まれる。

この時期藤原地域で出土する大和A・Bについてはそのほとんどがa・bで占められ、ax・abやbx・baの割合は極端に少なくなる。飛鳥I~IIIに比べてそれぞれの形式に統一性がみられるという特徴が挙げられる。

⑤飛鳥V (図版15)

No.15藤原京第54-23次右京二条二坊 SE6340 (図版15) 大和A (3、4)が主体を占め、大和B (1、2)・他地域産はわずかである。小壺Bが出土しており、大和Bの手法で作られている。

No.16藤原宮第6次西方官衙南地区 SE1160 (図版15) 大和A (7~10)が主体を占め、大和B (5)・他地域産(6)は少ない。

No.17藤原京第50-28次左京九条四坊 SE2440 (図版15) 大和A (11、12)が主体を占め、大和B (13、14)・他地域産(15)の割合は少ない。大和Bは小壺Bのみである。

No.18藤原京第63-3次右京九条三坊 SE2660 (図版15) 大和A (17~19)が主体を占める。大和B・他地域産(16)の割合は少ない。

No.19飛鳥池遺跡第84次 (図版なし、飛鳥IV~V) 現在遺物整理段階中でデータの数的把握を行えなかったが、概観する限り大和A・大和Bがほぼ同じ割合を占める。また鍋の出土量が多いのが特徴である。

宮・京内ではこの時期も飛鳥IVと同様、大和A・Bはa・bが大半を占めており、形式に統一性がみられる。

⑥奈良 (図版16)

No.20藤原宮第36次西北官衙地区 SD145 (図版16) 大和A (4~9)が主体を占め、大和B (1、2)・他地域(3)の割合はわずかである。出土した小壺Bは大和Bの手法である。

No.21藤原京第47次左京六条三坊 SE4740 (図版なし) すべて大和Aで構成されている。

No.22橋寺遺跡 SK05 (図版16) 上記の2遺跡とは様相を異にする。主体を占めるものは

№20・№21と同様に大和A（11、15、16）であるが、大和B（10、12～14）が一定量含まれる構成になっている。

2. 時期別にみた変化（表2、3、図版6～8）

以上飛鳥Ⅰ～奈良時代の飛鳥・藤原地域における煮炊具の様相をみてみると、藤原京成立の時期を境に大きな変化がみられることがわかる。煮炊具の変化は2点ある。

第一点は、大和A・大和Bそれぞれの型式のなかでの形態の差が統一される一つまり形式の統一化がおこることである。これは藤原地域の遺跡に顕著に現れる。まず藤原宮成立前、飛鳥Ⅰ～Ⅲまではax・abやbx・baの数値が高く、大和A・大和Bの中でもさまざまなバリエーションがみられる。製作技法の上では大和A大和Bと大きく二つにくることができるが、それぞれのなかでさらに小さな形式に細分されたり、互いの要素が混じり合う現象も起きている。またこの時期は遺跡ごとの独自性が強く、各遺跡ごとに形式の差異がみられる。

次の藤原宮造営直前、飛鳥Ⅳの時期ではax・abやbx・baの数値は飛鳥Ⅰ～Ⅲに比べ、低くなっている。つまり大和A・大和Bはa・bというひとつの典型的なタイプで占められるわけである。この形式の統一は藤原宮成立以降、飛鳥Ⅴ・奈良時代にわたっても続いている。

第二点は、藤原地域における土師器甕の様相の変化である。飛鳥Ⅰ～Ⅳの時期は各遺跡ごとに大和A・大和Bの割合はまちまちで、Aが多いところもあればBが多いところもある。全体を通してみると、この時期までは大和A・大和Bの両者とも飛鳥・藤原地域の煮炊具の主流を占めていたと考えられる。しかし飛鳥Ⅴの時期になると藤原宮・京内における煮炊具の様相は一変する。大和Aが大部分を占めるようになり、大和Bはごくわずかしか含まれないようになる。また飛鳥Ⅳの時期頃に小壺Bという器種が出現する。形態は甕Aを小型化したようなミニチュア土器である。作り方の上では甕と変わることはなくこの器種についても甕工人の手によるものと推測される。この小壺Bはそのほとんどがいずれも大和Bの製作技法で作られており、飛鳥Ⅴの時期では宮・京内においても一遺跡数個の割合で一定量出土している。飛鳥Ⅴにおける宮・京内の遺跡は大和Aが主体を占め、大和Bの小壺Bが混じるといのが典型的なパターンであるといえる。奈良時代にはいってもかつての宮・京域内の遺跡は同様の様相を示す。

3. 地域別にみた傾向（表2、3、図版6～8）

つぎに藤原宮・京がおかれていた藤原地域と、京外、周辺地域である飛鳥地域との比較を行ないたい。

飛鳥Ⅰ～Ⅲは藤原地域の遺跡が少ないので比較が難しいが、№1 雷丘北方遺跡第5次SD

3580・Na 6 藤原宮第66次西方官衙北地区 SE7320をみる限りでは、図版 6 の様に大和 A・大和 B がともに主流を占め、Na 1 に関しては表 3 の様に大和 A・大和 B の中でも a・b と異なるものがみられることから、飛鳥地域における煮炊具の様相と変わりはないといえる。

飛鳥Ⅳについては、上述したように、この時期藤原地域の遺跡では大和 A・大和 B の形式の統一化がみられるが、飛鳥地域に位置する Na13 石神遺跡第 3 次 SE650 や Na14 飛鳥池遺跡第 93 次 SE59 では依然として大和 A・大和 B のなかで形式にばらつきが認められる。

飛鳥Ⅴの時期になると両者の違いははっきりとする。宮・京城内の遺跡では出土土師器甕の大半を大和 A が占め、大和 B は小壺 B というかたちでしか含まれなくなる。これにたいして飛鳥地域では、飛鳥Ⅳ～Ⅴに相当する Na18 飛鳥池遺跡第 84 次 SD01・SG30 にみられるように依然として大和 B が主流を占めている。また大和 A・大和 B のなかでもさまざまなタイプが存在する。

奈良時代に至っては、かつての宮・京内の遺跡である Na19 藤原宮第 36 次西北官衙地区 SD145・Na20 藤原京第 47 次左京六条三坊 SE4740 は、大和 A が主流を占め、大和 B の小壺 B が含まれるという飛鳥Ⅴの宮・京城内と同じ内容になっている。Na20 は伴出した「香山」の墨書土器から、奈良時代にここが香山正倉という地方官衙であった可能性が高い。一方この時期の飛鳥地域は Na21 橋寺遺跡 SK05 をみると、大和 A が量的に優勢ながらも大和 B が一定量を占めている。この構成は先に挙げた宮・京城内の遺跡と性格を異にするものである。

第 4 章 藤原の都と甕

以上の分析の結果から読み取れる傾向を、整理し列挙しておく。

- ① 藤原地域においては、飛鳥Ⅰ～Ⅲの時期までは形式にさまざまなバリエーション (ax・ab、bx・ba) がみられた大和 A 型・大和 B 型が、飛鳥Ⅳの時期以降は形式に統一がみられ、ほぼ a・b のみで占められるようになる。
- ② 藤原地域においては、飛鳥Ⅰ～Ⅳの時期までは大和 A 型・大和 B 型がともに主流を占めていたが、藤原京成立 (飛鳥Ⅴ) 以降になると大和 A 型が主体を占めるようになり、大和 B 型は小壺 B のかたちでわずかに残る。
- ③ 飛鳥地域においては、大和 A 型・大和 B 型の形式の統一化は藤原宮・京内に比べて緩やかに進む。
- ④ 飛鳥地域においては、藤原京成立 (飛鳥Ⅴ) 以降も大和 B 型が一定量を占める。

上記のような現象は何を意味するのであろうか。以下考察として①・②から 1. 藤原宮・京内の土師器甕の供給体制のありかたを、③・④から 2. 藤原京周辺地域 (飛鳥地域) の土師器甕の生産・消費システムのありかたを導き出していきたい。

1. 都の甕—都城独自の供給体制の成立

藤原京成立前、飛鳥・藤原地域では大和A型・大和B型が土師器甕の主流を占め、遺跡ごとに両者の割合は異なり、それぞれの形式にもさまざまなバリエーションがみられる。この様相は土師器甕が大和A型・大和B型という大きなふたつの技術基盤の上に成り立ちながら、小規模な単位で複数の製作集団が存在していたことを示し、自給自足的な在地生産・消費がされていたことが想定できる。

この状況が藤原京成立前後を境に宮・京内の遺跡において大きく変容する。まず飛鳥Ⅳの時期に形式の統一化がすすみ(③)、つぎに飛鳥Ⅴの時期から大和A型が主体を占める(④)という独特の様相を示す。このふたつの現象は宮・京内で使われる土師器甕が「a」というひとつの形式のものに限定されていったことを表わしている。つまり都城内の土師器甕はaという同じ製作技法をもったグループによって供給されており、都城内独自の土師器甕供給体制が存在していたことになる。それまでの自給自足的な在地生産から、藤原京という巨大な消費地への供給を担うため、大和A型のなかのいくつかの製作集団が都城内の供給体制に組み込まれ、そのなかで都城供給用の甕の規範ができ、形式の統一化が進んだのであろう。

この宮・京内に供給された大和A型の一部であるa形式は都城における土師器甕のモデルとして平城京・長岡京・平安京にわたってつづいていく。在地生産・消費からはなれた都城専用の甕として発展していくことからこのa形式の甕は三好氏、小森氏が言うところの「都城形甕」と呼べるものであり、藤原京の成立において都城形甕が成立するといえる。

また宮・京内では小壺Bというかたちで大和B型が存在する(④)。飛鳥Ⅳの時期頃に出現し、この器種は大和Bの手法でつくられている。小壺Bは都城内の祭祀行為に伴う土器として考えられている。藤原宮・京内で祭祀関連の特殊土器に限り、大和B型が供給されていることは、日常的供給と非日常的供給の仕組みがはっきりと区別されていたことを表わしているといえる⁽⁹⁾。

2. 都の外の甕—在地甕の生産体制

一方、藤原京外にあたる飛鳥地域は都城の成立によって土師器甕の生産・消費システムの上で何らかの影響を受けたのであろうか。もし都城の土師器甕の供給体制が、周辺地域の土師器甕の生産・消費システムを巻き込むかたちで存在していたとすれば、飛鳥地域においても藤原京成立以降は宮・京内の遺跡と同様に形式の統一がみられ、大和A型が主体を占めるという様相になるはずである。

しかし飛鳥地域の遺跡は飛鳥Ⅳになっても形式にバリエーションがみられ(③)、飛鳥Ⅴ以降も大和B型が一定量出土している(④)。この状況は藤原京成立前(飛鳥Ⅰ～Ⅲ)の土

師器甕の様相と変わらないことになる。つまり京外の飛鳥地域では、都城の成立後も以前と同じ生産・消費システムが存在していたことになる。これは、都城独自の土師器甕供給体制が周辺地域の生産・消費システムを崩すことなく、藤原宮・京内で完結したものであり、周辺地域（飛鳥地域）では依然として小規模なまとまりでの在地生産・消費がおこなわれていたことを意味する。

飛鳥地域で取り上げた遺跡をみると、Na22橋寺遺跡 SK05は寺院跡である。寺院内で独自に土器製作者集団を抱え独立した採算をとっていたことも考えられるが、その際でも周辺地域の土師器甕製作者集団を抱えていた可能性が高い。従って、Na22橋寺遺跡 SK05での大和B型が一定量含まれるあり方は、飛鳥地域における在地の土師器甕の様相を表わしているといえる。またNa13石神遺跡第3次 SE650、Na14飛鳥池遺跡第93次 SE59、Na19飛鳥池遺跡第87次 SD01・SG30はどちらも官宮の施設であるが、石神遺跡は饗宴施設、飛鳥池遺跡は生産工房であり都城とは性格を異にしている。同じ政府の管理下におかれた遺跡でも特殊な性格の遺跡の場合、都城とは異なる土師器甕供給体制をとっていたことは十分にありえる。飛鳥Ⅰ～Ⅲまでの飛鳥地域での土師器甕のありかたと、奈良時代に入ってからNa22橋寺遺跡 SK05の土師器甕のありかたを考え合わせると、Na13石神遺跡第3次 SE650、Na14飛鳥池遺跡第93次 SE59、Na19飛鳥池遺跡第87次 SD01・SG30において、大和B型が一定量を占め形式に多様性がみられることは飛鳥Ⅳ・Ⅴの時期における飛鳥地域の在地の様相に近い状況を示しているといえよう。

現時点では飛鳥地域における集落遺跡の調査がなされておらず、在地の生産体制を把握することは困難であるが、上記の資料から飛鳥Ⅳ・Ⅴの時期に飛鳥地域では在地の自給自足的な生産・消費が続いていたとの推測を提示しておく。

1. で述べたように藤原宮・京内の土師器甕供給体制は、在地の製作集団の一部を取り込むかたちで編成された。それ以外の製作集団は宮・京内の供給体制に組み込まれることはなく、都城の成立によってそれまでの生産・消費システムに直接的な影響や変化はみられなかったと考えられる。つまり、周辺地域は都城内とは別の経済・流通基盤の上に成り立っていたといえるであろう。

おわりに

最後にこれまでの分析を通して明らかになったことをまとめ、今後の展望について述べる。

1. まとめ

①藤原宮・京内では都城の成立にともない、形式の上で統一化された大和A型（a形式）が

主体を占めるようになる。これは在地の製作集団の一部が都城の土師器甕供給体制に組み込まれた結果であり、藤原京の成立をもって都城独自の土師器甕供給体制が成立したといえる。また宮・京内では小壺Bのみ大和B型であることから祭祀関連の土器のみの供給を請け負っていた集団が存在し、日常的供給と非日常的供給の区別がなされていたことが想定される。

- ②藤原京外に位置する飛鳥地域では、都城成立以降も大和B型が一定量を占め、形式にもバリエーションがみられることから、都城成立前と同様に小規模な単位による在地生産・消費がおこなわれていたと考えられる。

2. 今後の展望

今回は資料的な限界から様々な性格を有している遺跡同士を比較せざるをえなかった。各遺跡は集落、宮・寺院に関連する施設、工房など多様であり、同時期・同地域の遺跡でも、遺跡の性格によって土師器甕の様相も変わってくるとおもわれる。今後、資料が充実すればそれぞれの性格ごとに各時期・各地域の比較を行なえるであろう。今回は宮・京内（藤原地域）とその周辺（飛鳥地域）を対象としたが、資料の増加を待って、都城内での違いや周辺地域内での生産体制の具体的な内容の検討も視野に入れたい。

さらに、供膳具形態とのセット関係を明らかにすることによって、煮炊具だけでなく藤原宮・京における土師器全体の供給体制の復元が可能である。供膳具形態は口縁端部の形態や製作技法、胎土・色調などから大きく四群に分類されている（文献1）。これらが煮炊具のグループと対応する可能性が以前から指摘されている（文献35）。現段階では供膳具と煮炊具のセット関係は確定されていない。しかし、今回の土師器甕の分析で大和A型・大和B型のなかでもいくつかの形式がみられ、供膳具のなかでも各群類でさらにいくつかのグループに細分される可能性があることや、杯類でも遺跡によって特定のグループが多いところも報告されている⁽¹⁰⁾。供膳具・煮炊具それぞれで製作単位による分類を十分におこない、両者の対応関係を明らかにすれば、供膳具・煮炊具両方の面から藤原宮・京内における土師器供給体制を復元できるのではないだろうか。

これまで土師器甕の分析を通して、都城における供給体制や周辺地域との関わりを明らかにすることで、「みやこ」というものの具体的なイメージを若干ではあるが提示することができた。藤原京の成立によって官人層や都市生活者（非生産者）が誕生し、大量の物資が必要となってくる。そのため、それまで自給自足的な生産・消費を行っていた土師器甕製作集団の一部を都城で消費する甕の供給元にする事態が起こった。そして当時の律令体制は、ある一定のまとまりのある土師器甕製作集団を供給体制に組み入れるだけの統括力をもって

いたことになる。しかしこれはあくまで都城内の需要をまかなうためのものであり、周辺地域では依然として自給自足的な生産・消費が続いていたのである。

(わたなべ じゅんこ 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 研究補佐員)

本稿をまとめるにあたっては、奈良大学文学部文化財学科 泉拓良先生、植野浩三先生、奈良国立文化財研究所 川越俊一、巽淳一郎、安田龍太郎、西口壽生、井上和人、深澤芳樹の諸氏に御指導、御教示を賜った。また写真図版に関しては、奈良国立文化財研究所 井上直夫氏、中村一郎氏の御協力を得た。記して謝意申し上げます。

本稿は、1997年度奈良大学文化財学科提出卒業論文と、1998年度奈良国立文化財研究所所内特別研究 研究会『古代土師器の生産と流通』（代表 川越俊一）における発表「飛鳥・藤原地域の煮沸具」での成果をまとめたものである。

註

- (1) 西氏は3類に分類した土師器甕を、供膳具とのセット関係で捉えている。A₁は杯C、A₂は杯G、A₃は杯Hと対応するとしている（文献35）。
- (2) 次山氏はaグループが杯A・C、bグループが杯G、cグループが杯Hと対応するとしている。
- (3) 例えば西氏がA₂・A₃、次山氏がb・cグループとして調整から二型式に分類しているものを、巽氏は製作技法の上から大和Bとひとつの型式にまとめている。また西氏がA₂、巽氏が大和B型の一部にしているものを次山氏はa'グループとして西氏のA₁、巽氏の大和A型に相当するaグループのなかに入れており、別型式のものになってしまっている。
- (4) 土師器甕の内面に残った当具痕を観察すると、当具には土製・木製、有紋・無紋など様々な種類があることがわかる（文献43）。
- (5) ここでいう「作業台」とは西氏・巽氏・次山氏がいうところの「型」と同じものを指すが、成形の際底部を支えるためのものであり、全体のプロポーションを規制することはないのであえて「作業台」と呼ぶことにする。
- (6) 時期区分、器種分類は右の報告にならった（文献9・文献10）
- (7) ab・baそれぞれに比例配分し、小数点以下は四捨五入した。
- (8) 平城京の祭祀においては金子裕之氏の研究（文献3）があり、ミニチュア土器・人面土器・土馬・移動式竈などが大祓に用いられたとしている。また大祓の創始やルーツは藤原京に求めることが出来るとしている。
- (9) 巽氏は、平城京以降大和B型の製作技法で墨書人面用甕が生産され、Bグループは専ら儀器生産にあたったと想定されている（文献7）。

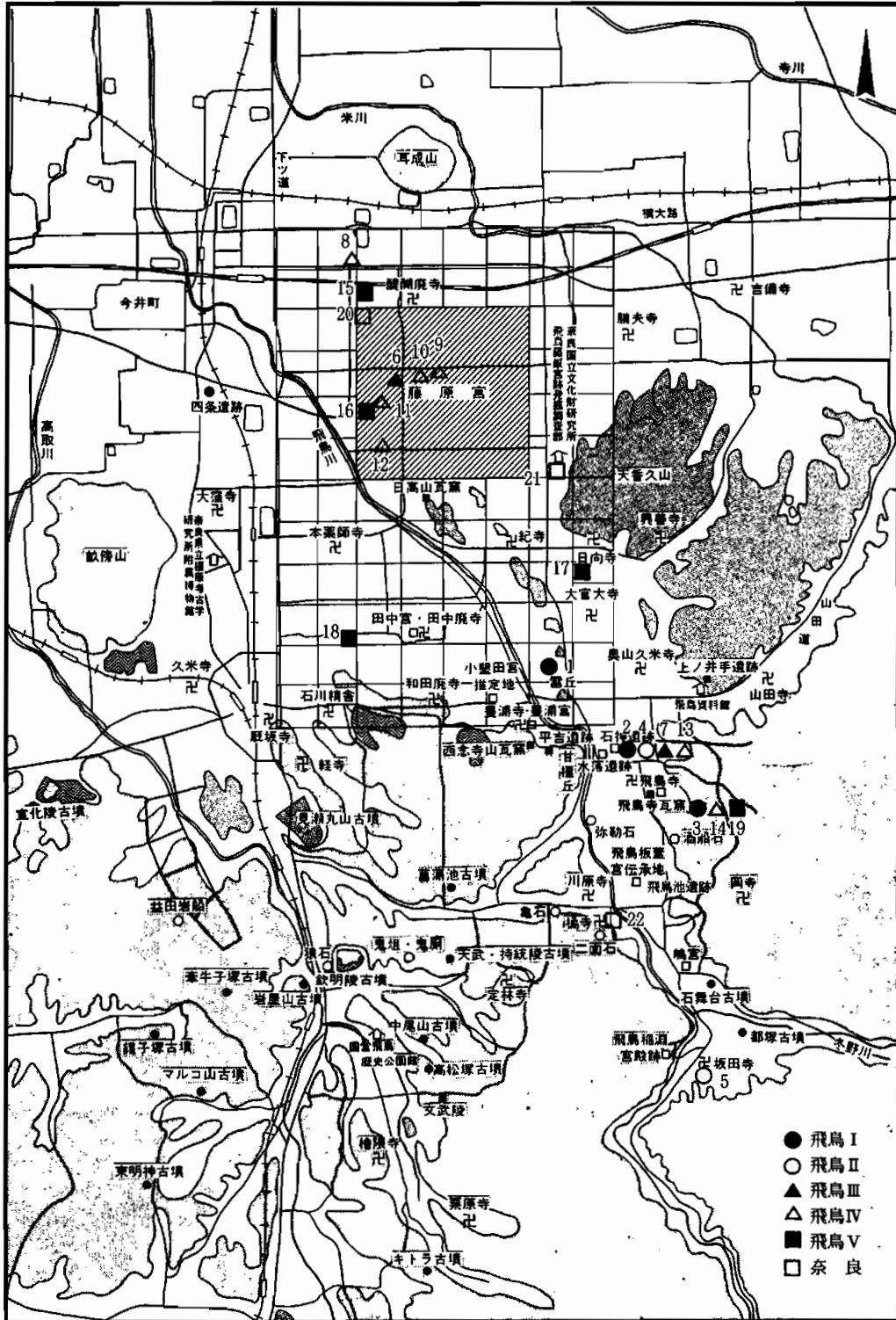
- (10) 杯Gは口縁端部の形状・胎土・色調の違いによって、杯G₁類・杯G₂類・G₃類に細分でき（文献31）、杯Cは底部の形態から二種類に分類できる（文献28）。

参考文献（五十音順）

- 文献1 相原嘉之「7世紀の土器Ⅰ大和 都城」『古代の土器5-1 七世紀の土器（近畿東部・東海編）』1997
- 文献2 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』第27巻第2号 1980
- 文献3 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985
- 文献4 古代の土器研究会『古代の土器研究会第4回シンポジウム古代の土器研究—律令的土器式西・東4 煮炊具—』1996
- 文献5 古代の土器研究会『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』1996
- 文献6 小森俊寛「平安京跡出土の土師器甕」古代の土器研究会第60回定例会 1995
- 文献7 巽淳一郎「煮炊具の生産と供給」『古代の土器研究会第4回シンポジウム古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮炊具—』1996
- 文献8 次山 淳「飛鳥・藤原」『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』1996
- 文献9 奈文研『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1976
- 文献10 奈文研『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978
- 文献11 奈文研「藤原宮西方官衙地域の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978
- 文献12 奈文研「坂田寺跡の調査」『概報3』1973
- 文献13 奈文研「藤原宮第16次調査」『概報6』1976
- 文献14 奈文研「藤原宮第20次調査」『概報8』1978
- 文献15 奈文研「藤原宮第36次調査」『概報14』1984
- 文献16 奈文研「石神遺跡第3次調査」『概報14』1984
- 文献17 奈文研「石神遺跡第4次調査」『概報15』1985
- 文献18 奈文研「藤原京第47次調査」『概報17』1987
- 文献19 奈文研「橘寺遺跡の調査」『概報17』1987
- 文献20 奈文研「藤原京第52次調査」『概報18』1988
- 文献21 奈文研「藤原京第54-23次調査」『概報19』1989
- 文献22 奈文研「藤原京第58-20次調査」『概報20』1990
- 文献23 奈文研「藤原京第63-3次調査」『概報21』1991
- 文献24 奈文研「藤原宮第66次調査」『概報22』1992
- 文献25 奈文研「飛鳥池遺跡の調査」『概報22』1992
- 文献26 奈文研「藤原宮第72次調査」『概報24』1994

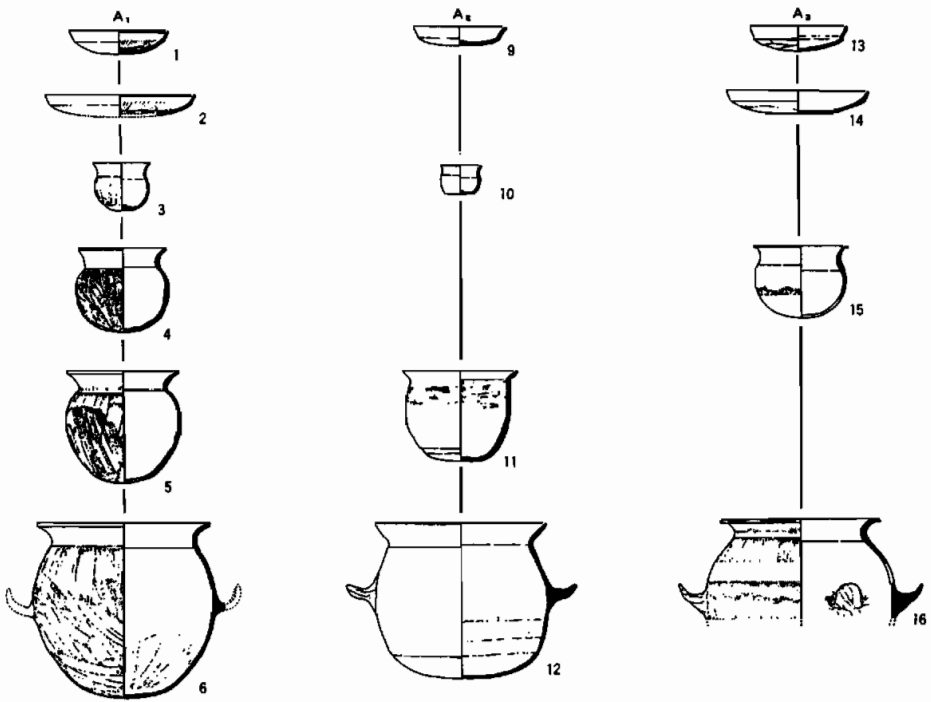
- 文献27 奈文研「雷丘北方遺跡の調査」『概報26』1996
- 文献28 奈文研「藤原宮内裏東官衙地区の調査・第78次調査」『概報26』1996
- 文献29 奈文研「飛鳥池遺跡の調査 第87次」『奈良国立文化財研究所年報1998－Ⅱ』1998
- 文献30 奈文研「飛鳥池遺跡の調査 第93次」『奈良国立文化財研究所年報1999－Ⅱ』1999
- 文献31 奈文研『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987
- 文献32 西 弘海「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』1974
- 文献33 西 弘海「藤原宮西方官出土土器の編年と西方官衙についての考察」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978
- 文献34 西 弘海「雷丘東方遺跡の調査 3 遺物A土器」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』1980
- 文献35 西 弘海「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』1986
- 文献36 西口寿生「土師器の地域色－6・7世紀の畿内とその周辺－」『文化財論集－奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集』1983
- 文献37 西口寿生「土器の産地と交流」『新版古代の日本6 古代資料研究の方法』1993
- 文献38 西口寿生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『奈良国立文化財研究所年報1997－Ⅰ』1997
- 文献39 平尾政幸「畿内の土師器甕の製作技法」『古代の土器研究会第4回シンポジウム古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4 煮炊具－』1996
- 文献40 三好美穂「古代土師器甕の検討－大和・山城型甕の製作技術を中心として－」『文化財学論集』1994
- 文献41 三好美穂「都城の煮炊具」『古代の土器研究会第4回シンポジウム古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4 煮炊具－』1996
- 文献42 三好美穂「Ⅱ大和」『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』1996
- 文献43 渡邊淳子「コラム：あすかふじわら③ 土師質の当具について」『奈良国立文化財研究所年報1999－Ⅱ』1999

（奈文研＝奈良国立文化財研究所、概報＝飛鳥・藤原宮発掘調査概報）



対象遺跡分布図

図版 2

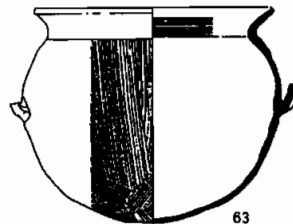


西氏分類 (文献35より転載、一部改変)

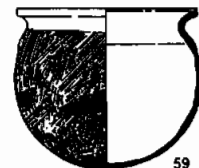
大和A型



藤原宮西方官衝 SE8061

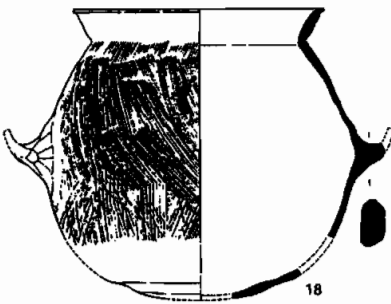


前川遺跡 井戸1



前川遺跡 井戸2

大和B型



坂田寺 SG100

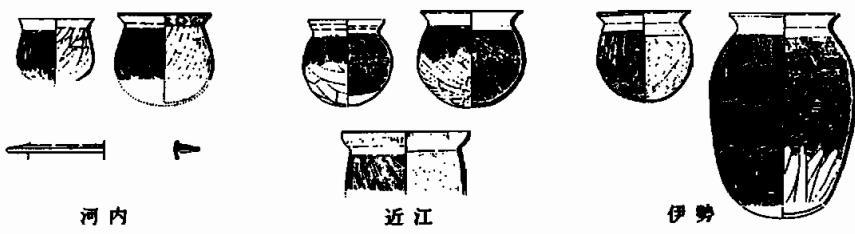
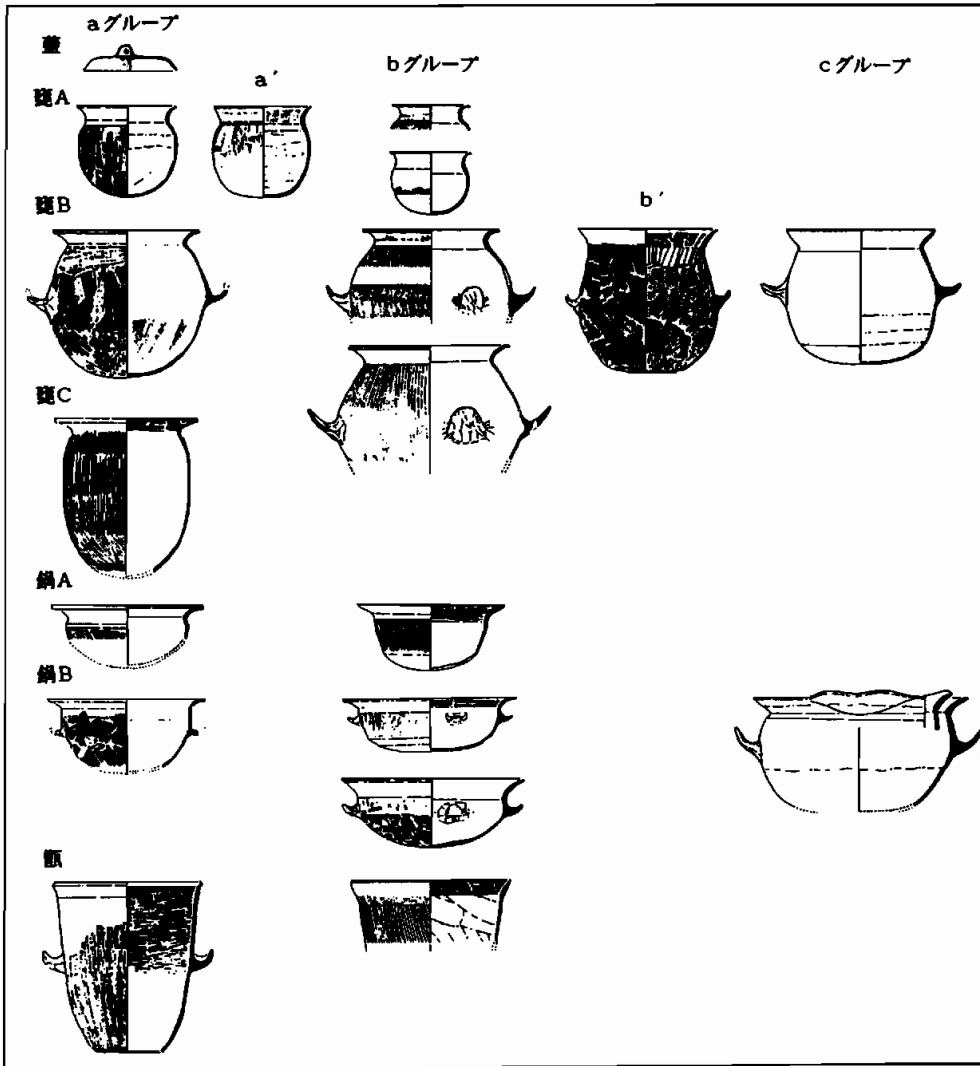


藤原宮西方官衝 SE8061



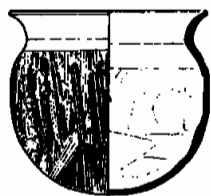
平城京左京九条三坊東堀河

異氏分類 (文献7より転載)



次山氏分類 (文献 8 より転載)

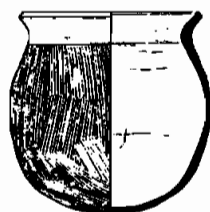
大和A型



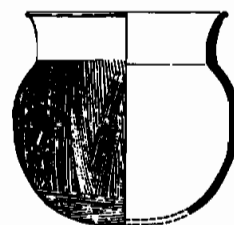
a



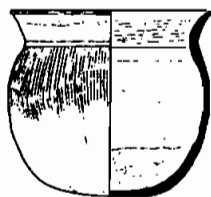
ab



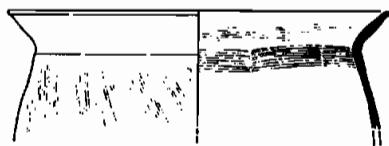
ax



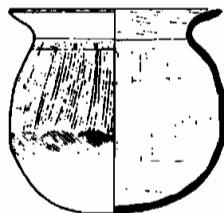
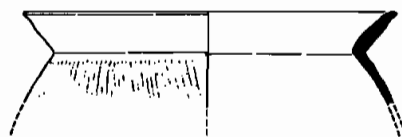
大和B型



b



ba

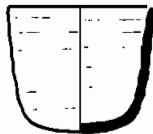


bx

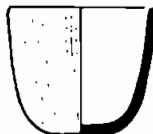


渡邊分類

大和A型



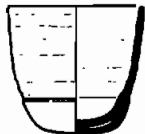
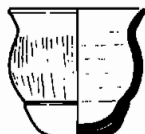
①粘土紐を巻き上げる（底部は平底）



②体部下半にハケ調整をし、器面を整える

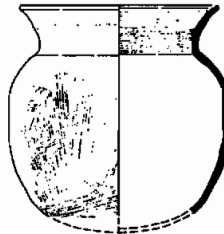
③底部～体部を叩き丸底・球胴状にする
口縁部をつくる④底部外面に再度ハケ調整を施し、
内面に板ナデを施し器面を平滑にする

大和B型

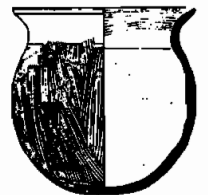
①作業台に粘土を詰め、
その上に粘土紐を巻き上げる②体部外面に粗いハケまたはナデを施す
口縁部をつくる③内面をナデ付け、器面を整える
継ぎ目をナデ消す④作業台から外し、外面体部下半～底部を
ナデ、段差を消し器面を整える

大和A型・大和B型の製作技法

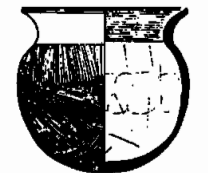
大和A型



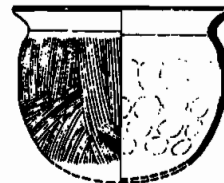
飛鳥Ⅰ～Ⅲ



飛鳥Ⅳ

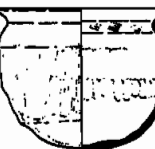
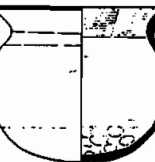
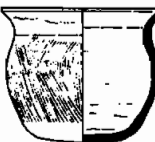


飛鳥Ⅴ

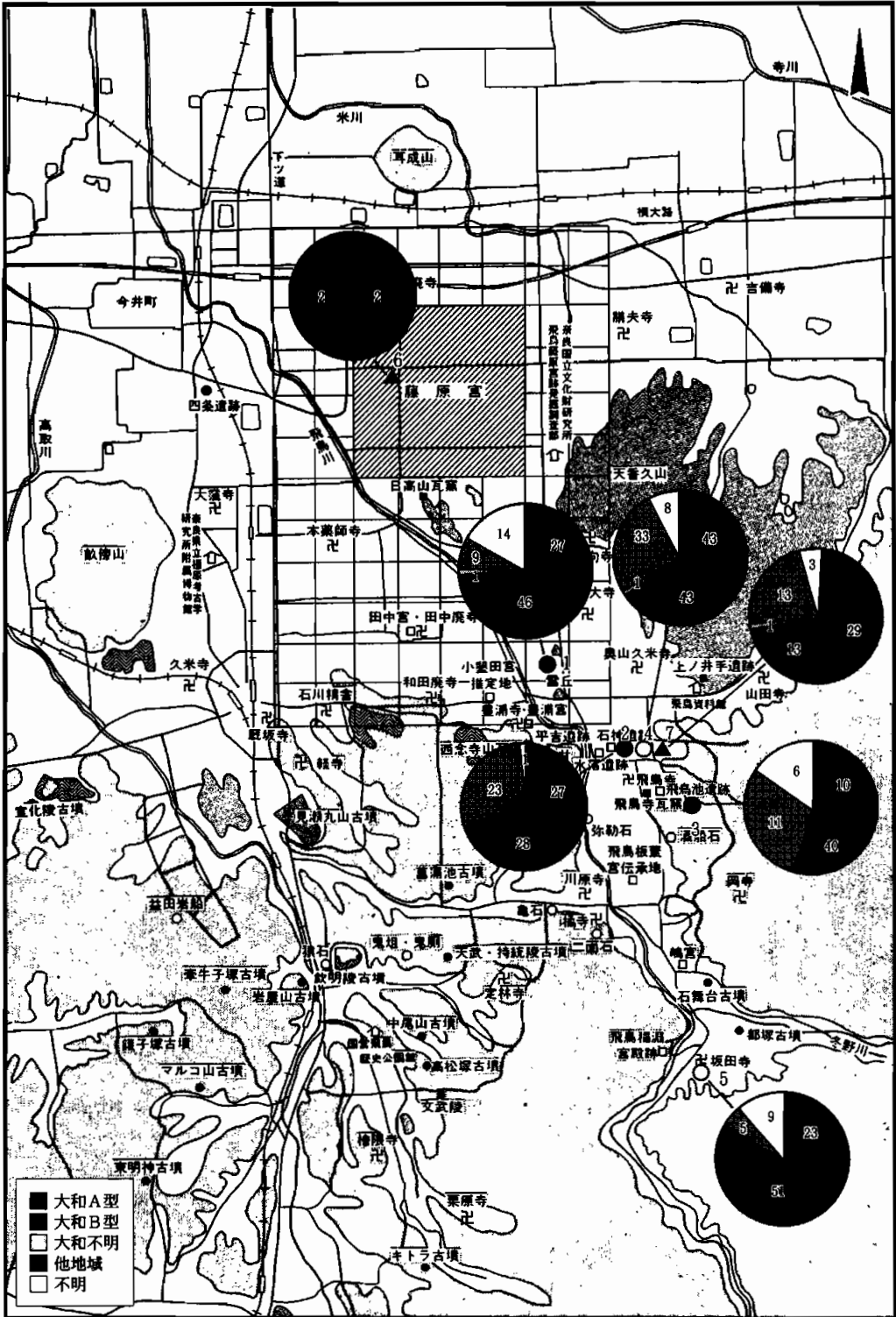


奈良

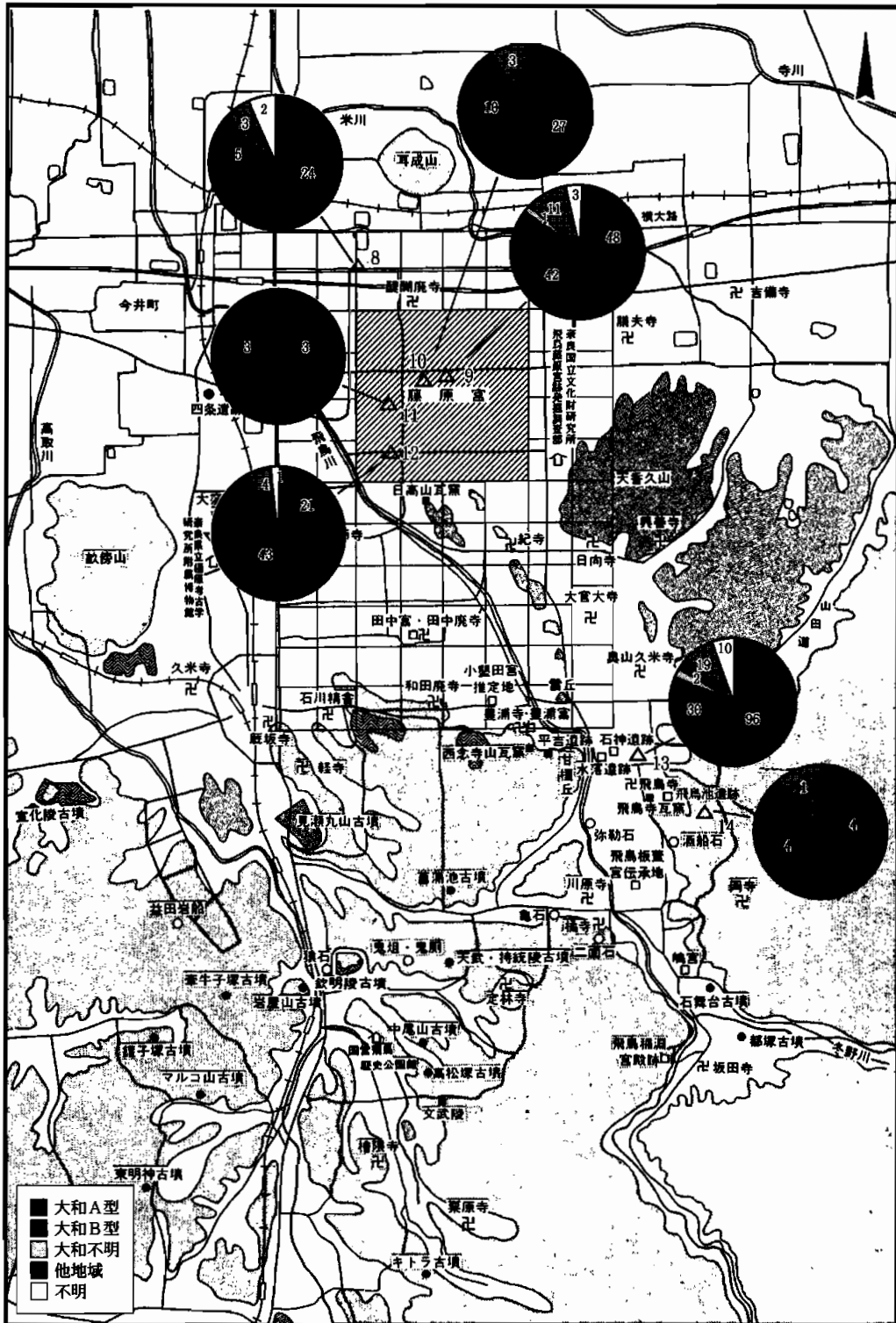
大和B型



大和A型・大和B型の時間的変遷



大和A型・大和B型・他地域の割合（飛鳥Ⅰ～Ⅲ）



大和A型・大和B型・他地域の割合（飛鳥IV）

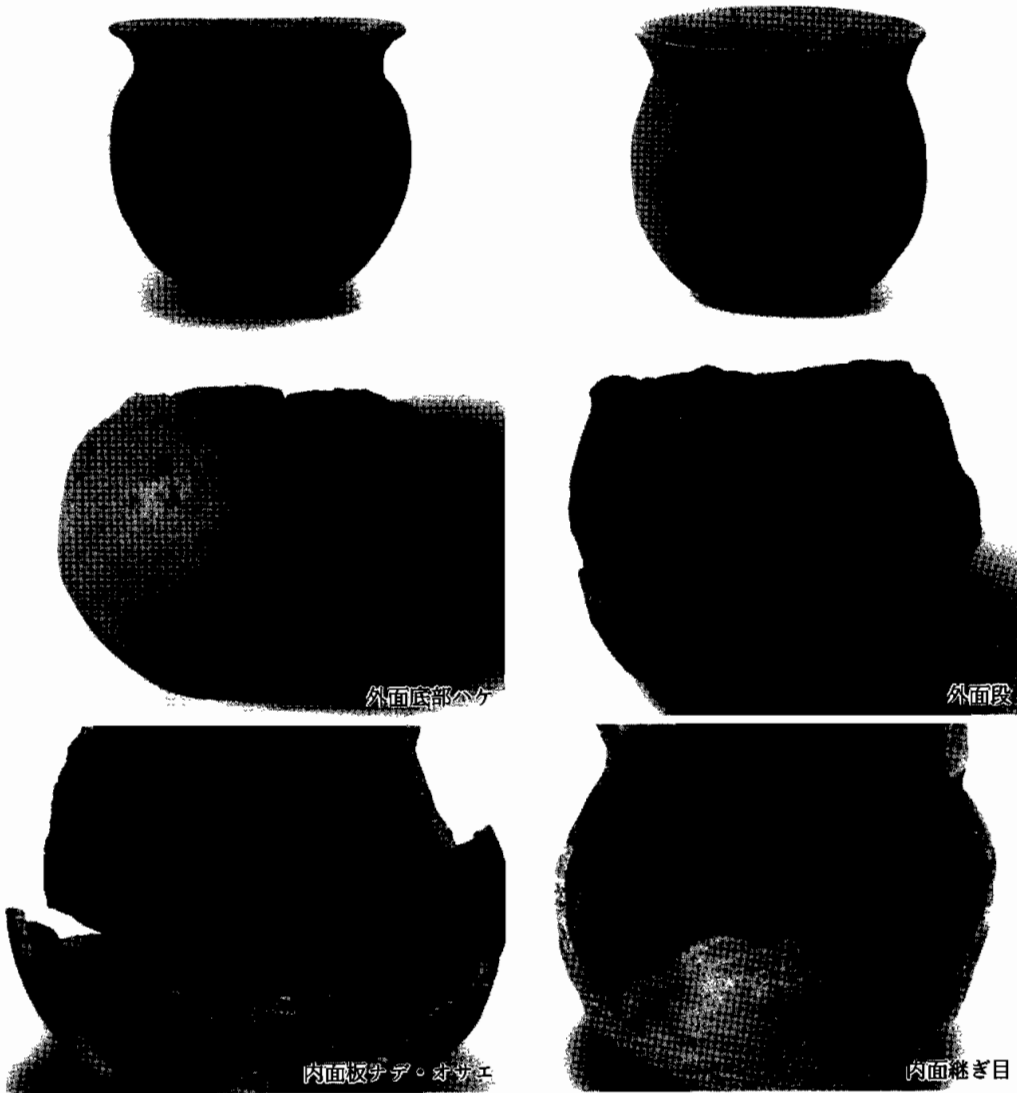
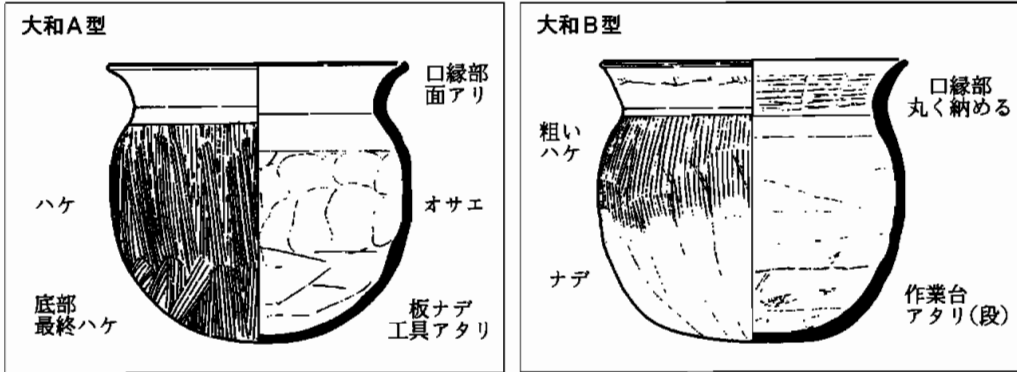
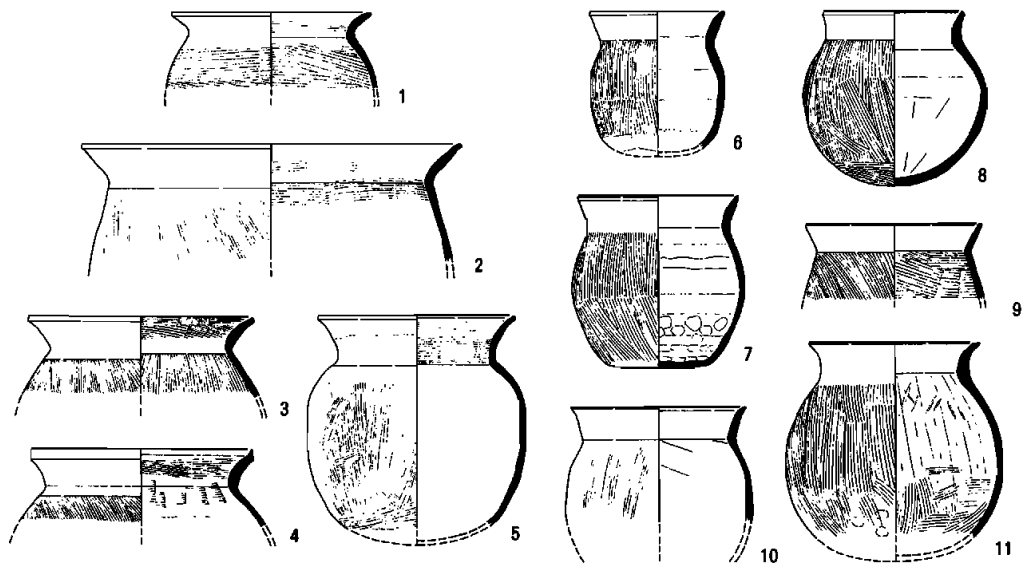


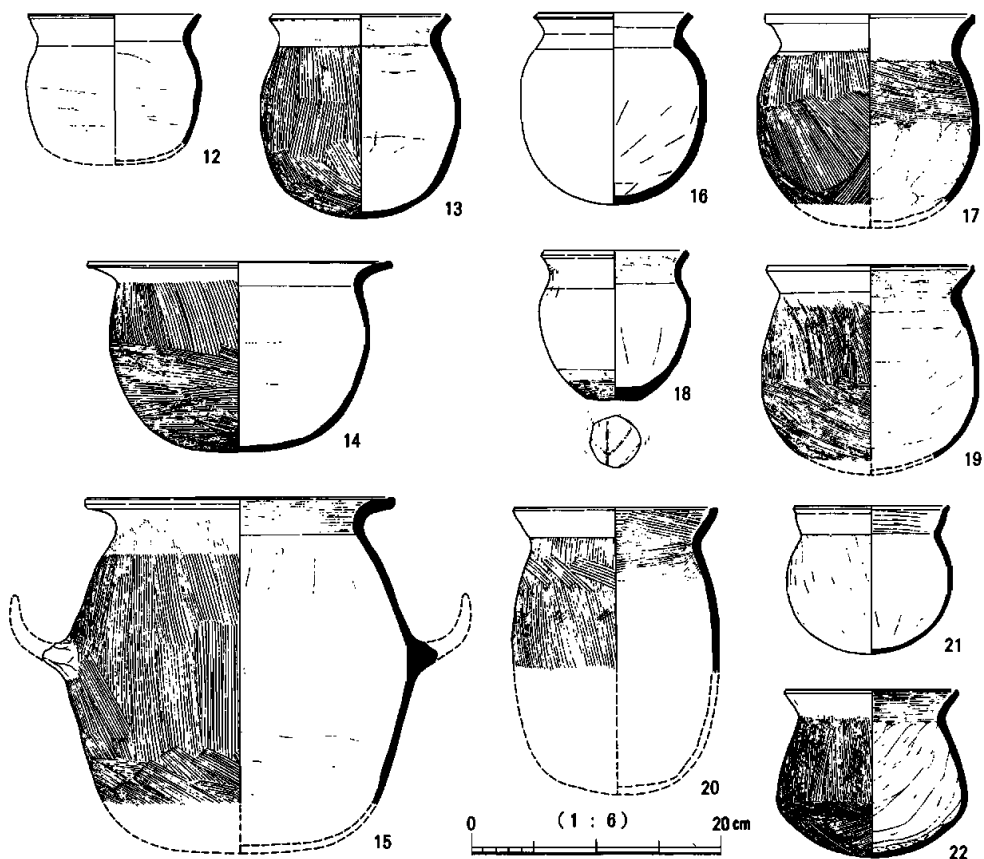
写真-大和A型・大和B型

図版10

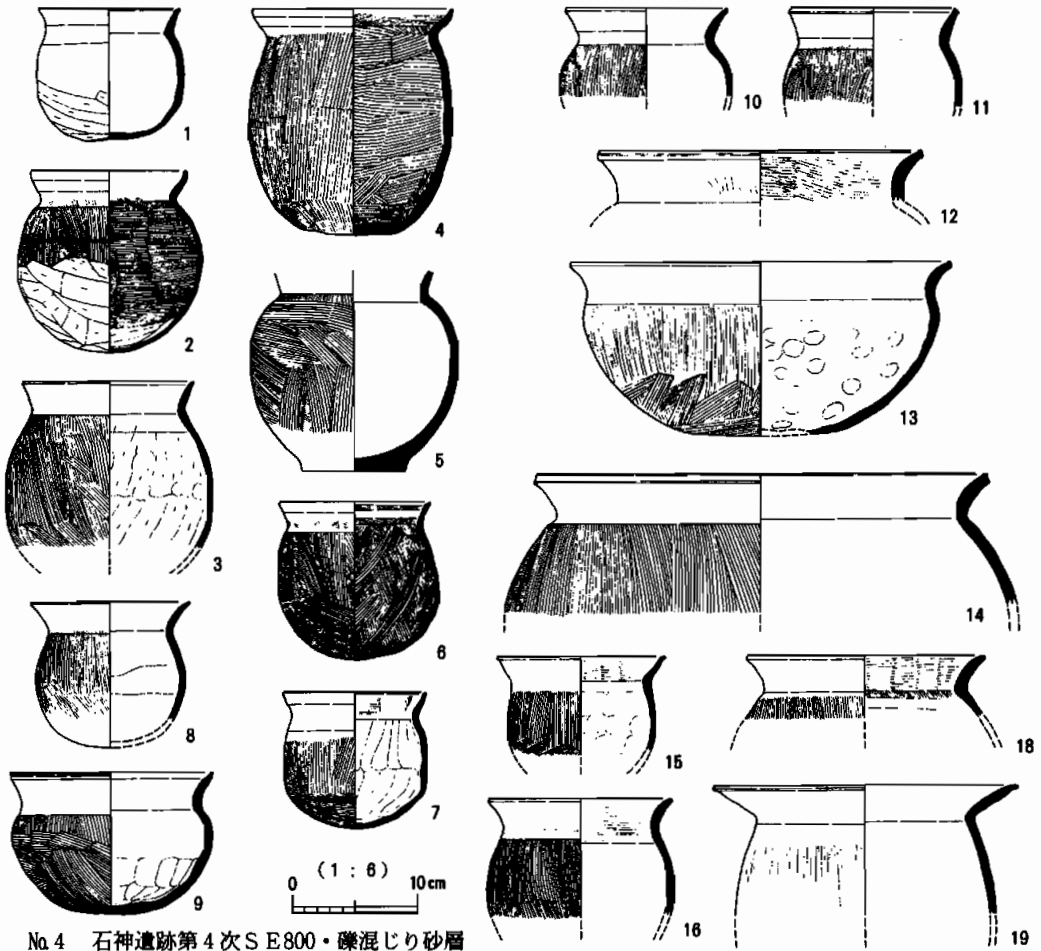


No. 1 雷丘北方遺跡第5次 S D 3580

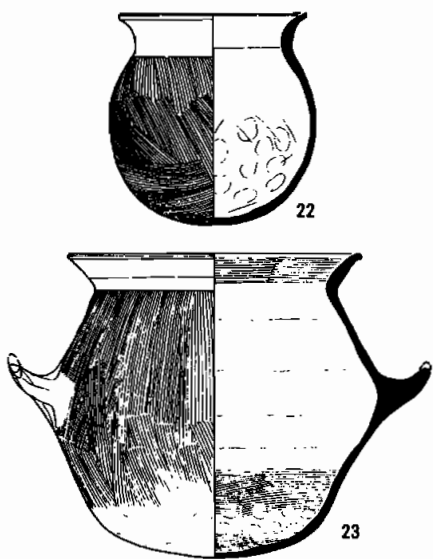
No. 2 石神遺跡第4次 S E 800・茶褐色有機土層



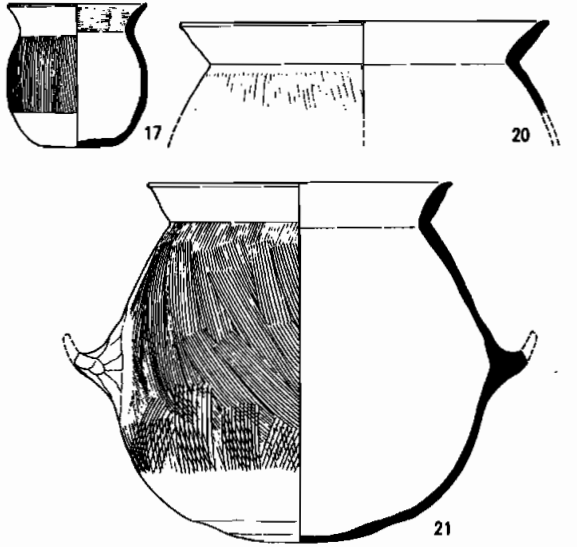
No. 3 飛鳥池遺跡 S E 809・灰綠色粘砂層



№ 4 石神遺跡第4次S E 800・礫混じり砂層

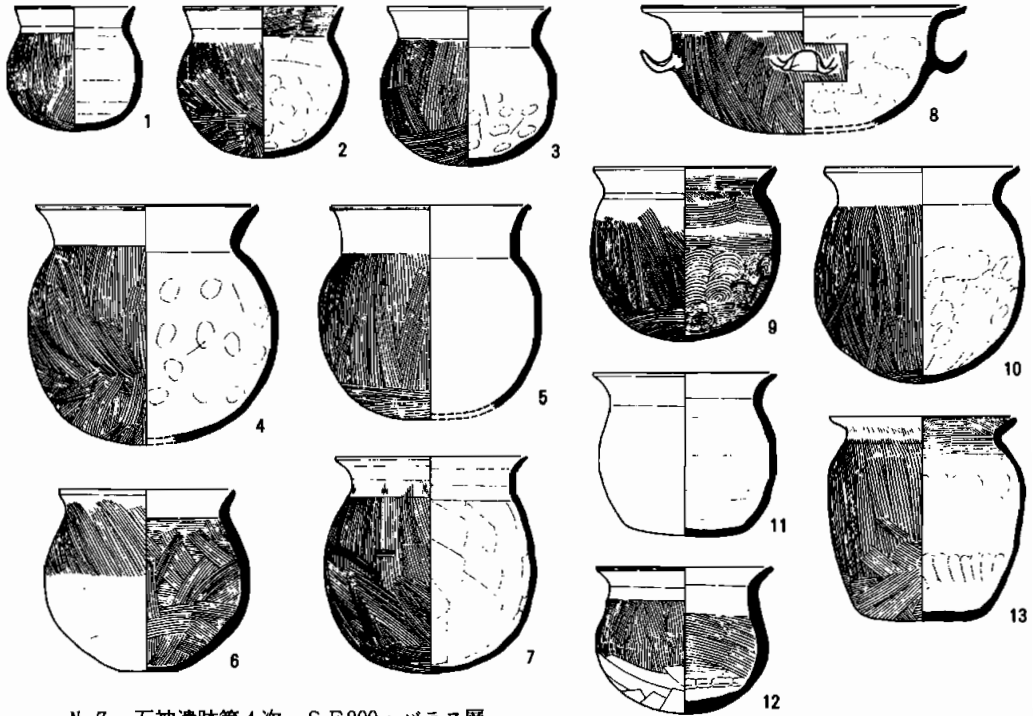


№ 6 藤原宮第66次西方官衙北地区 S E 7320



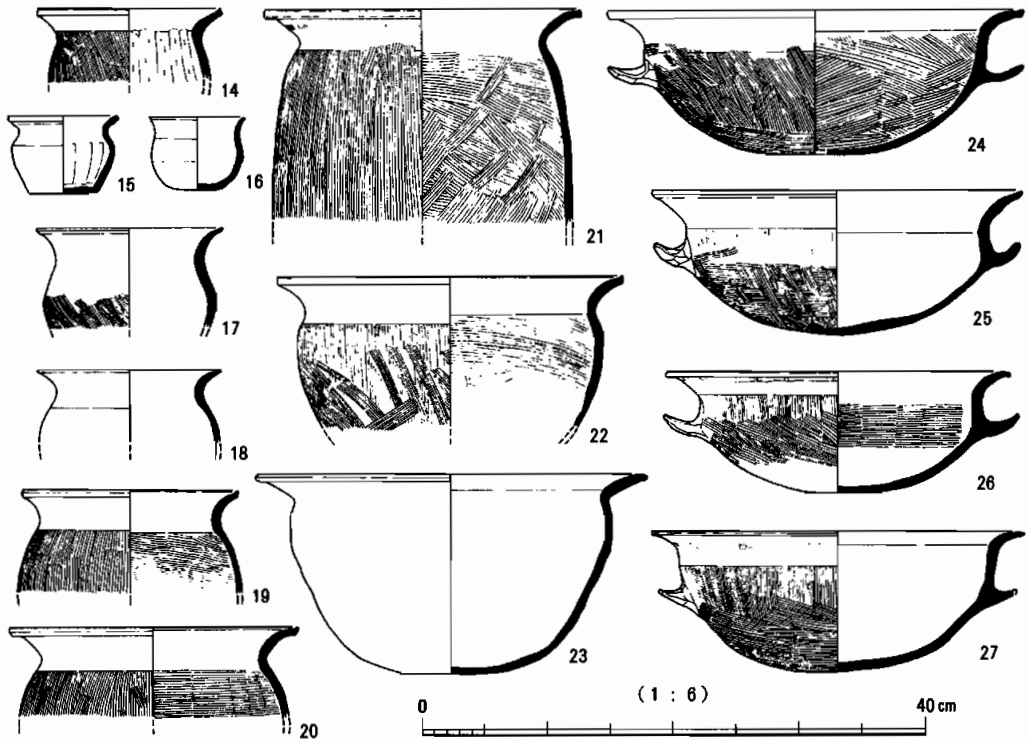
№ 5 坂田寺遺跡 S G 100

図版12

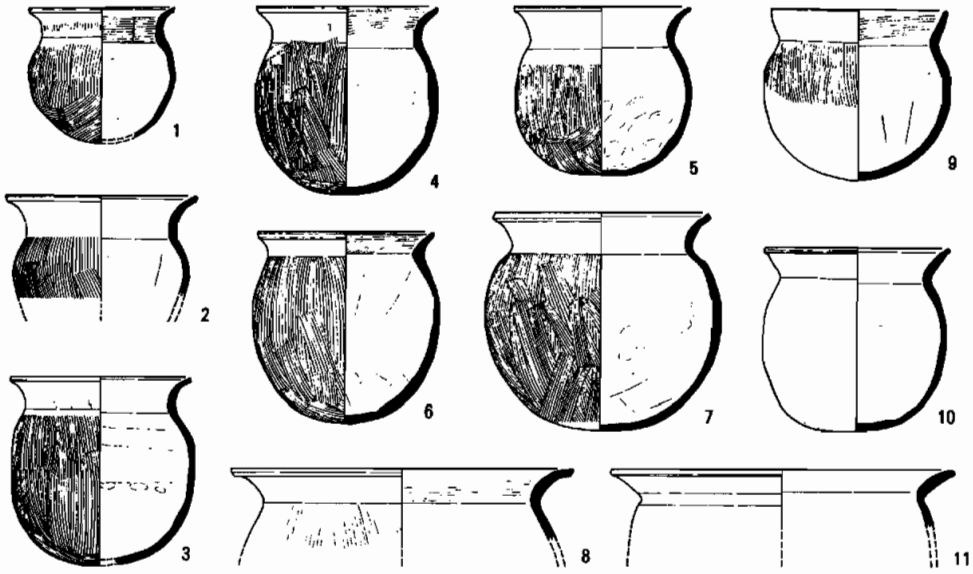


№.7 石神遺跡第4次 S E 800・バラス層

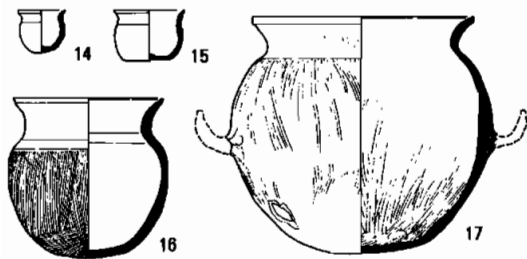
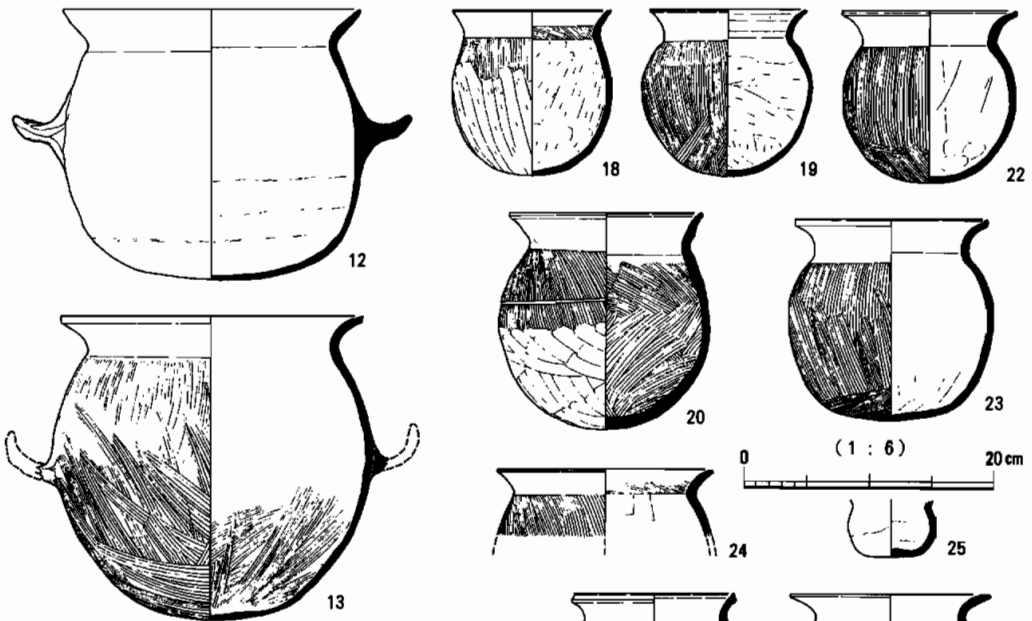
№.8 藤原京第52次 右京二条三坊 S E 5290



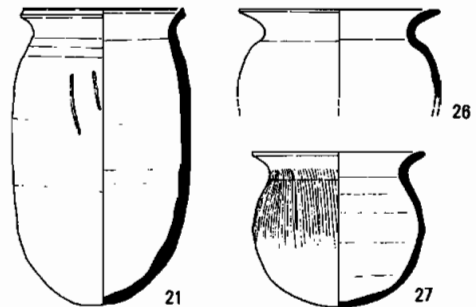
№.9 藤原宮第20次大極殿院地区 S D 1901A・木炭層



No.10 藤原宮第16次内裏地区 S E 1780

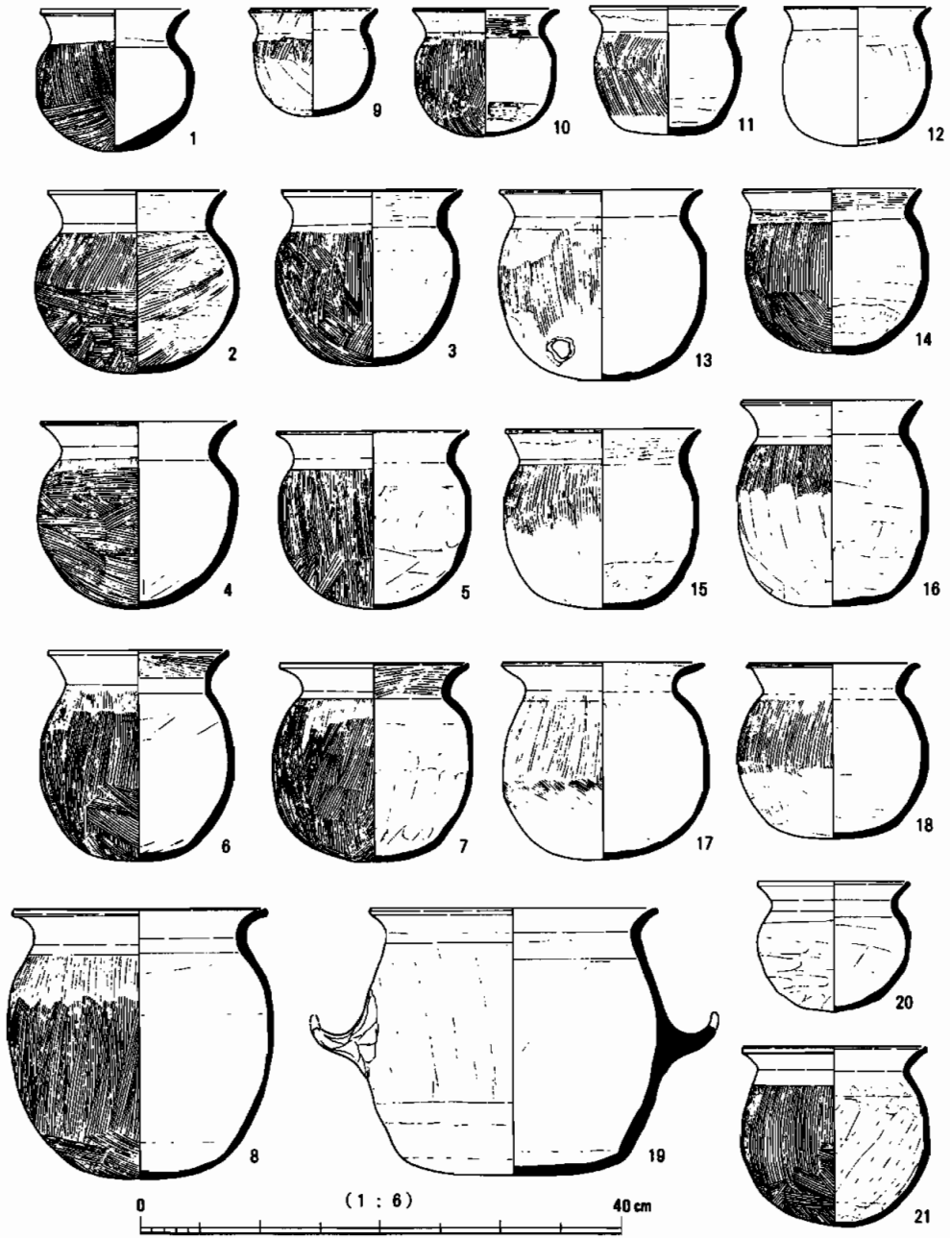


No.11 藤原宮第7次西方官衙地区 S E 1205

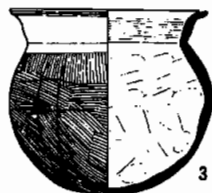
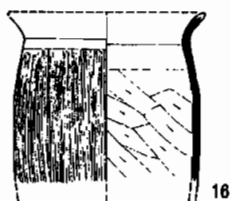
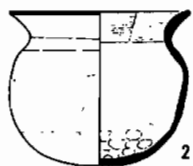
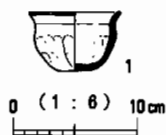


No.13 石神遺跡第3次 S E 650

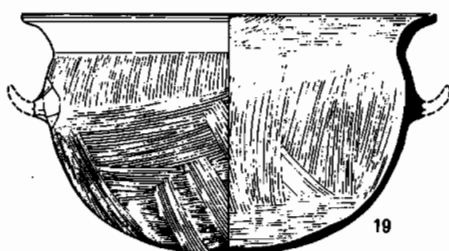
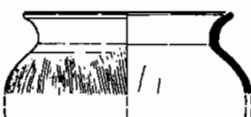
图版14



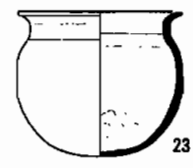
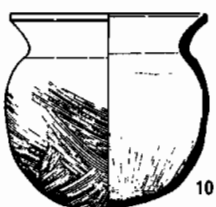
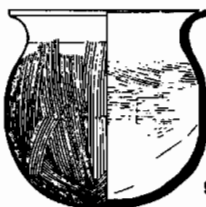
No.12 藤原宮第72次西南官衙地区 S E 8061



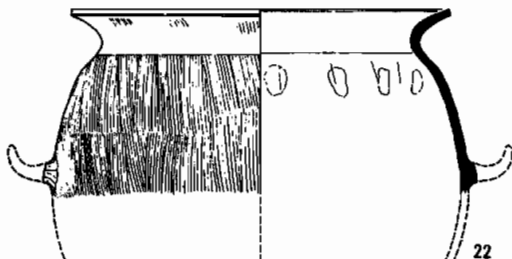
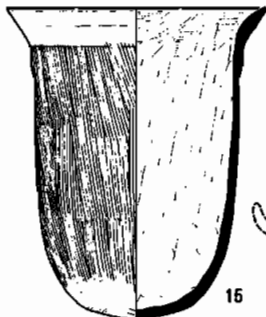
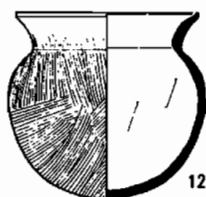
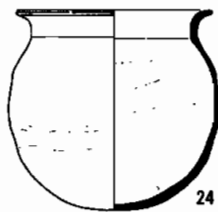
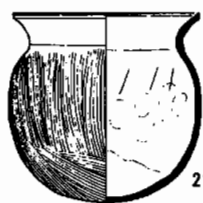
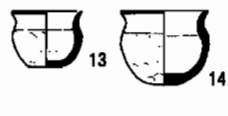
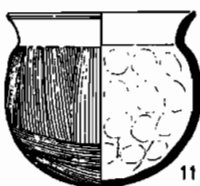
No.15 藤原京54-23次右京二条二坊 S E 6340



No.18 藤原京第63-3次右京九条三坊 S E 2660



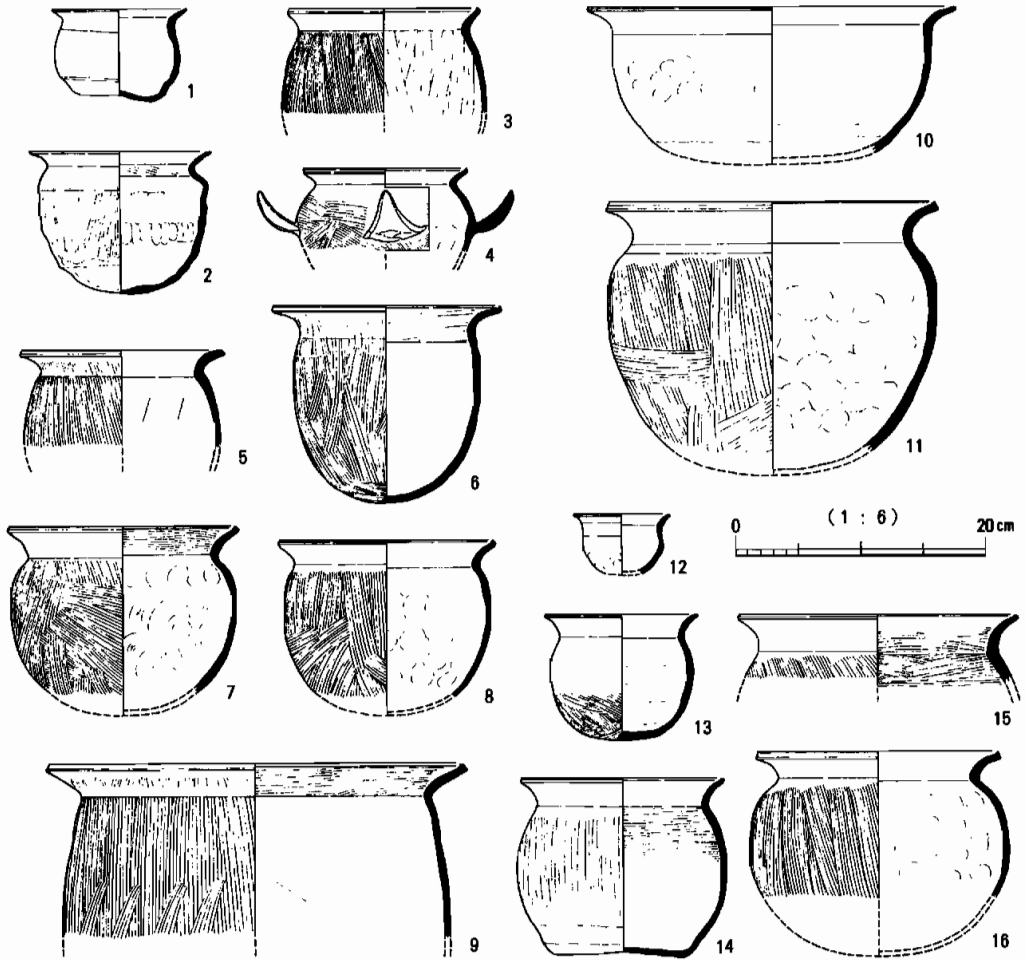
No.16 藤原宮第6次西方官衙南地区 S E 1160



No.17 藤原京第58-20次左京九条四坊 S E 2440

No.14 飛鳥池遺跡第93次 S E 59

图版16



No.20 藤原宮第36次西北官衙地区 S D145

No.22 橘寺遺跡 S K05